6月號

婦人運動

第5卷第6號



職業婦人社發行

大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和二年五月廿八日印刷納本 同二年六月五日發行―第五卷第六號

千家元麿氏
佐藤惣之助氏 序

英美子著

第二詩集 春の顔

麗名高く好評激甚忽再版

四六判美装●價金壹圓
百五十頁●送料六錢

（著者直接御申込に限り記念のサインいたします
東京市外巣鴨町二丁目七 廣島館内）

著者は女性詩人のモダン的先驅、新興詩壇の異彩なり。純眞、清達、自由なる詩風、鋭角多彩にして颯々たる思想、正に氏は、崇高、豊麗、情熱的なる春の顔である。

本著に對する諸名家の高評

新居格氏……立體的多角的な飛躍詩人
千家元麿氏……華やかで純眞で快活な詩人
「炬火」の評……素晴らしい製作力と眞執なる詩作態度に驚かされる
萩原朔太郎氏……情熱の詩人豊かな才藻
井東憲氏……自由にして清達なる苦鬪の詩
生田花世氏……華やかな表現のうちに人間的な深い悩みがある
廣瀬操吉氏……眞に崇高な女性のイメージを歌ふ女戰士
佐藤惣之助氏……鋭角、奇、飄逸、妖異、强頸、颯々たる思想、完成。
川路柳虹氏……全篇に素晴らしい飛躍を見せてゐる
秋田雨雀氏……人生を本當に摑んでゐる
西條八十氏……若しこの鐘の音が一齊に鳴る時が來たなら怖ろしい詩人である

東京神田小川町二三　平凡社　振替東京二九六三九

婦人運動

第五巻——六月號——第六號

婦人運動

六月號





經濟界の恐慌と無産階級

財界の恐慌を救濟するといふことが表面の理由になつて居るため七億圓といふ巨額の補償案も忽ち通過し社會一般から痛烈な反對論も起らなかつたのであるが、私共は今度位露骨に有産階級の横暴振りを見せつけられたことはないと思ふ。

不良銀行は遠慮なく倒してしまへといふ事は今日迄有産階級の主張であり銀行家自身までがこれに贊成して居たのではないか。然るに不良銀行中の最も不良たる臺灣銀行を救濟するために有産階級が全部狂奔したといふことは何たる矛盾であらう。臺灣銀行を破産させれば、財界の大混亂を來すといふのが表面の理由であるけれども、私は其裏面の理由が臺銀の債權者たる約三十の大銀行を救ふにあつたと信ずる。

幾萬といふ小預金者を有する不良小銀行は見殺しにされて大債權者を有する臺銀が救濟され、貴族銀行たる十五銀行が將に救濟されんとして居るのは明白に有産階級の横暴を語るものではないか。

然し臺銀をして現在の不始末に至らしめたものは歷代內閣の責任であるから、言ふまでもなく政友會も憲政會も其責任を分擔しなければならぬ。

正直なる者は放棄され不正直なる者には國費を以て救濟されるといふことなれば正義の觀念は全く消滅するより外あるまい。私共の希望は臺銀をして自然の運命を辿らしむることであつた若し其結果として財界の大恐慌が勃發するとしても私共は充分其苦痛を忍ぶべき筈であつた。無産階級に取りては新に七億圓の負擔を增加するよりも恐慌を忍ぶ方がどれだけ利益であつたかも知れぬ。

然し恐慌の責任は全部有産階級の負ふべきものであるから、臨時議會に於ける三法案の議決の外に今一法案を議決すべきではなかつたかと思ふ。

即ち、七億圓の補償金はこれは特別支出とすると同時に特別徵税法を制定して特別收入を得るといふことである

即ち五千圓以上の收入に對する所得稅率及び五十萬圓以上の遺產相續に對する稅率を增加することにより七億圓を得るといふことである。斯の如くすれば有產階級は自らの失策に對して責任を負ふことになり、これを無產階級に轉嫁しないことになる。斯の如き法案はこれを次の議會に提出しても決して遲いことはない。――安部磯雄――

兒童愛護デー

去る五月五日、端午の節句を期して全國一齊の乳兒愛護デーが行はれた。東京ではラヂオ放送を初め、宣傳飛行、活動寫眞、演奏會、講演會、乳兒嗜好品展覽會、兒童衛生展覽會、その他乳兒審査會等が行はれた。

兒童愛護の精神が、このやうに社會の注目する所となつたことは非常に喜ばしい事である。然し、果してかうしたお祭り騷ぎ的一日ぎりの宣傳が、多數の、無產家庭に屬する兒童の生活にどれだけの福音をもたらす事が出來たかといふ事になると、遺憾ながら多くの疑問を挾まずにはゐられぬのである

兒童愛護の精神は、今さら宣傳されるまでもなく、全ての人が十二分に本能的に持つてゐるものであることは、事新しく云ふまでもない事であらう。

それにも拘らずその愛護の精神を十分に發揮することが出來ないのは何故であるか。

そこには、現在の最も大きな社會問題である經濟問題が横つてゐる事を見のがすこと出來ぬ。多くの無產家庭に於ては、その親たちが如何にその兒を愛撫しようとし、いかに、優れた科學的恩惠をその日常生活にとりいれようとしても、事實に於てそれは出來ないのである。例へばその愛兒が恐るべき病魔の前兆であるホンの微細な徴候を來たした場合、親たちは、彼等がその一日の收入の全部を以てしても足りない所の醫者の手を煩はす事は、到底望んでえられぬ事と云はねばならぬ。又如何に優れた玩具や嗜好品が子供のために發明されたとしてもその日の生活に追はれてゐる親たちにとつては、それは天上の星に手を伸ばすの愚かさに等しいではないか。

かうした意味に於て、兒童愛護デーそれは、その成長の曉に於て無限の負擔を脊おはされてゐる未來の小國民にとつて、その生死をさへ保證されない現在のやうな社會、國家に對しての火の如き抗議であらなければならぬ。

――奥むめお――



日本の前途を憂ふ
――經濟眼から――

岡莊吉

一

財界の整理緊縮を旗印として立つてゐた憲政會内閣は、産業及び財界の根本的立て直しを實現し得ないまゝに、整理のための整理、緊縮のための緊縮といふ自己聲明に力負けしてやむなく彌縫の連續を餘儀なくしつゝ、最後に臺灣銀行の窮境暴露といふ一幕にとゞめをさゝれて、内心不滿ながらに内閣を投出してしまつた。

これは當然の成行であつて、本來、今日の發達過程にある資本主義經濟組織が必然に遭遇すべき行詰り狀態に對して、その根本的打開策が、如何なる原理によつて立案さるべきかは、われらの同志が常に示教をおしまないところであるが、如何せん、彼等舊政治家は、殆んど迷妄にとらはれて根本解決の鍵を用ひ得ないのである。しかも、その鍵を用ひない限りは、結局破綻を招くの外はないのである。

二

だが、現在日本の政界は、政權掌握のための政黨あるのみで、彼等に何等國策を樹立するだけの研究も抱負もあるのではない。すなはち、憲政會に取つて代つた政友會内閣にどれほどの政策を持合はせてゐるであらうか。國民中の誰一人として彼等の政策が如何なるものであるかを知つてゐるものはないのである。

單に産業立國とか、積極政策とかいつたところで、それは

畢竟一の概念に過ぎなくて、その內容が如何に空疎であるかは、田中首相の議會に於ける辯明のうちにはつきりと窺はれる。

果して、財界救濟の案として、日銀の非常貸出に對する五億圓限度の補償と、臺灣銀行救濟のための二億圓の補償を國民の負擔に歸せしめる法律案を通過させたことによつて知られる。之が將來に於て、必ずしも全部國民の負擔に歸するとは斷言し得ないが、將來の財界事情の如何によつては、國民としては之を負擔するだけの覺悟はしてゐなくてはならないこれが如何に不當であるかは前號に於て數言を費しておいたが、これに抗議を呈するにしては、今日のわが無產階級は、あまりに無自覺であり過ぎる。

三

無自覺な上に、內輪喧嘩と小ざかしい似而非リーダーに禍ひせらるゝ無產團體の現狀に對しては、われらは愛相をつかしてゐるものであるから、これに言及することは避ける。だが、日本の將來といふことに對しては、單に無產階級の負ふべからざる負擔を負ふことを別問題として、國民全體の問題として見て、實に云ふべからざる憂慮を禁じ得ないものがある。

今はたゞ經濟眼からのみ立論しておかう。われらが無言でその負擔に耐へることを覺悟した財界救濟案は、第五十三回臨時議會に於て遂に默認を餘儀なくせしめられた。その結果財界は一時的にもせよ崩壞をまぬがれた。同時に、事實上、わが通貨は膨脹の道程に上つた。さうして同時に、諸物價は暴落を思ひ止まり、その反面に、國際經濟上、圓貨は三ドル以上も暴落した。この暴落の勢は、筆者が筆をとりつゝある今日に於てもなほ底止するところを知らない現狀である。

尤も現下の國際經濟界に於ては、外國殊に米國あたりの資本團が國際爲替場裡に於て一種の戰術的投機を試みつつあることは、何人も知つてゐるところであるが、しかも、この國際爲替市場の市價なるものは極めて合理的過程を以て進退するものであつて、決して一二資本國の意のまゝになるやうな小規模のものではないのだ。實に微妙な正確さを以て動いてゐるものである。

かく考へつゝ、圓貨の信用失墜を思ふ時、わが財界が既に不健全な進路をたどりつゝあることに氣付くであらう。

四

外電の傳ふるところによれば、目前のわが財界を悲觀するよりも、高橋藏相の積極策、通貨膨脹政策に對して、わが財界の前途を悲觀するがために圓貨の暴落を豫想するのであるといふのである。その點がわれらも亦憂ふるところである。

七億圓までも、損失を覺悟することによつて、勢ひ通貨が膨脹することは自明の理路である。それだけでも既に怖るべきことであるが、現内閣は更に、より以上に、通貨脹膨策を案出しつゝありと傳へられてゐる。すなはち、土地の資金化政策である。

在來、主として農銀、興銀、勸銀、嘉銀等に於て不動産を擔保に貸出してゐた標準は、大約、時價の六掛に評價し、その評價の六掛を貸出す程度であつたが、今日は八掛の八掛を貸すと傳へられ、或は、時價の八掛までも貸出すとさへ傳へられてゐる。果して然らば、不動産の融通力は、在來の二倍以上にも上るわけだから、これが通貨膨脹の最大原因となることは疑ふの餘地がない。

更に、株券や公債に對しての融通率も殆んど九掛に達するといふに至つて、その不健全な放漫さは、寧ろ寒心に堪へない程度であると認めねばならない。

今日に於てこそ、世評がやかましいので、金融界の異常な膨脹を抑壓するやうな顔付をしてゐるが、本來の性根はとても抑へきれるものでない。閣僚中、既にその事を聲明してゐるものすらあるのだから、時期を見て必ずや積極策を露出して來るに相違ない。

五

ところが、こゝに考へねばならない重要な點がある。即ち國内的に通貨を膨脹させたとて、眞相に於て、産業の發展を來したとは見られないといふことである。いや、在來、わが國民に理解されてゐるやうな産業は一時的に勃興するかも知れない。けれども、全國民生活の上に永遠の大策たるべき合理的産業の勃興は、不幸にしてわれらの期待し得ないところである。

なぜといふに、彼等舊政治家の頭腦には、遺憾ながら徹底的に國策の研究が出來てゐない。國家の産業を如何に立案すべきかそんなことはテンでわかつてはゐないのだ。こゝに於て單に景氣煽揚を策するに終るか、利權を伴ふ各種各樣の不健全な企業が簇せられる位のことにとゞまるのである。

その結果はどうなるか？　國内的に物價暴騰し勞銀も暴騰

し外面的の好景氣を來すことは明白である。けれどもそれが眞に生産增加を招來するものではない。現に今日の經濟組織に於ては常に操短の必要があるではないか。人が餘つてをり機械が餘つてゐる限りいくら操業してもよさゝうなものだが事實はさうは行かない。尤も通貨膨脹の結果、國內需要は增加するに相違ない、けれども、殆んどあらゆる原料品を國外の供給に仰がねばならない日本として、精製品の海外輸出による均衡を保たない限り、どうして永く原料の輸入に支拂ひ得るか。

一言にして盡せば、わが國民の國際的立場は、各自、身を持すること質素節約を旨とし、しかも、成るべく多く働いて少しでもより多く國外輸出を計らねば立ちゆかないのであるされぱこそ、全國的組織的に産業政策の確立を必要とするのである。

六

尤も、通貨膨脹の結果、國內的にはいくら物價が暴騰しても、他面に國際的に圓貨が暴落するとすれば、それによつて輸入減、輸出增となるに違ひないから却つて貿易上好結果を來すだらうといふ人もあるが、國際貸借決濟上、自國貨の暴落によつて如何に怖るべき損害を受けるかは云ふまでもないことで、もし、先年のマルクやルーブルの如き現象を圓貨の上に招來するとしたら如何。その時こそ、日本の金融經濟は破滅の運命に終るのではないか。

國際市場に於て、圓貨の正常なる價値を維持しつゝ、國內的には物價を低落せしめ、國外に對してはその廉價なる物資を提供することによつて、健實に海外市場を開拓してこそ、貿易促進の正路を步むものである。

然るに、無策にも、國內通貨の不健全なる膨脹を來すことによつて、國內産業勃興の唯一の方策なりと誤信し、根底なき企業の亂興を圖るが如きは、國家を危機に陷いれるものである。國民のエネルギーを亂用するものである。おそらく、その禍害は測るべからざる深刻なものとなり、全國家的に收拾の出來ない大破綻を來すであらう。

今日に於てさへ、モラトリアムの施行と、七億圓までの國家的損失補償によつて、辛じて一時を彌縫してゐるに過ぎない。その實質上、わが金融經濟が破綻してゐることは明々白々の現象である。この憂ふべき現象に對し、眞の救濟方法は通貨膨脹策にあるのではない。

通貨膨脹策といふものは、金融方法の一種の形式的展開に過ぎないもので、もし、この形式展開の實質が伴はない時には、それは、更にその破綻を深刻化し、且つ範圍を擴大するに至るのみだ。

幸にも、眞の意義に於て、合理的に國家産業が勃興し生産の發展を來すにつれて、通貨が膨脹するとせば、それは膨脹ではない當然の流通である。すなはち、卽今の通貨膨脹策なるものは、本末を逆轉してゐるために不健全を招來することゝなるのである。要は産業的發展の實質にのみ伴ふべきものである。そこに貨幣流通の健全さがある。

然るに現内閣は、この根本原則を逆用せんとしてゐる。從つてその所期の目的は逆轉に於て結果すると認めねばならない。われらが經濟眼から觀察して日本の前途に深憂を禁じ得ないのもこれがためである。

七

われらは、今日の資本主義經濟組織が必然の自己運命として、殆んど革命的變革を遂げねばならないものであることを確信してゐる。さうして、その來るべき組織が、社會的機能を完全に發揮すべき性質のものである點に於て、これを呼ぶに社會主義經濟組織の名を以てする。それは全國家的であり全社會的であり、統一的組織的であるべきだ。

從つてわれらの建設せんとする産業的組織は一面に於て、在來のものに對して組織的統一的整理を斷行し、他面に於て新規の計畫によつて新産業の勃興を圖らねばならない。卽ち消極的整理と積極的建設とであるが、この二つの努力も亦、一つの大組織内の兩面に過ぎないのである。

たとへば、電力統一、肥料統一、運送業の全國統一、金融機關の一元的統一、海運業の統一、紡績業の統一、製紙業の統一、その他鑛山、製鐵、造船……等大規模事業の組織的統一によつて、國民エネルギーの亂用を防止し浪費を節約し、他面には工業製品の國際的規格統一を實行して、製品の世界的供給に當り、海運の國際的發展を企畫して海國民の氣象とその地理的環境を利用し、海産の增殖を初め、その他數へ來らば國土内に於ける國際的産業發展の道も極めて多々あることを認める。

何といつても、われらは太平洋を母胎とし、東に米國を控へ、西に、支那、朝鮮、シベリヤを抱き、南に南洋諸島を友土としてゐるのだから、産業政策の積極的計畫を全國民の力

（一七頁へつゞく）

結婚までの處女時代

―進んで社會生活に入れ―

土田杏村

一

新しく女學校を卒業せられた方達に先づお祝ひの言葉を申し上げます。恐らく皆んさの唯今のお心は、其の嬉しい心持ちで一ぱいでせう。將來の事に就いて詳しくお考へを廻すほどの餘裕はまだ無いかも知れません。併しさうした悦びの心の隅つこでは、何處かまた取り止めの無い、寂しい氣持もただよつて居る事だと思ひます。第一皆さんは學校といふ一つの賴よりどころを失つたのです。此れからは皆さんが皆々獨り立ちで自分の途を選んで進まなければなりません。其れが何とも言へない不安な、また何處と無く寂しい心を皆さんに起させる事と思ひます。此れは誰れでもが學校を卒業した時に經驗する氣持ちです。敢て女に限つた事はありません。大學を卒業した時に、私はやはり其の氣持ちを經驗しました。殊に私の專攻して居た學科などは、社會の職業などとは全く沒交渉のものでしたから、卒業した間際の時には、實際不思議な感じに打たれたのです。併し此事は先きに卒業した人からよく聞かされて居ました。此時に襲うて來る或る悲觀的な感じに打ち勝つて行かなければならないこと、出來るだけ早く將來の方針を立てて勉强に取りかからなければならないこと、此時愚圖々々して居れば五六年は瞬く間に通ほり過ぎて了ひ、さて其後でどんなにあせつて見ても、もう到底追つつかないこと、だから卒業後の一二年が全く生涯の運命を定めて了ふこと、其等の事を私は先輩から聞かされましたが、此

の忠言は今なほ大へん有益であつたと思つて居ます。事柄は全く其の通りに私達卒業生の上に經過したのです。

で今皆さんと私との其れ〳〵の場合を比較して見ますれば事情に於て種々の相違は認められますが、併し其處に餘程多くの共通點があると思ひます。其れで私の場合に貰つた忠言を直ぐ皆さんの上に轉じたとしても、大して不當だとは申されますまい。いや、唯今の私は、皆さんもどうか私の貰つた忠言を皆さんの其れ〳〵の境遇に比較して味つて貰ひたいと切に望んで居ります。何故かといふに卒業後の一身の處置が餘り適當でなかつたために、後に非常の焦燥の氣分を持たされ、且つ其の結果も大して立派でなかつた實例を、私は此れまで餘りにも澤山見て居るからです。併し私などがいろいろと相談を受けた頃は、大抵は皆なもう其の結果を轉回するに遲くなり過ぎて居ました。皆さんも屹度さうした實例を澤山見て居られませう。けれども其の實例の中へ自分も數へられる事になるとは、卒業直後の今、まさかお考へになつては居られないでせう。が、其れは一に皆さんの今お取りになる手段による事です。私は此の私の言葉をお讀みになられる父兄の方にも是非お氣をつけて貰ひたいと思ふのですが、其れは今の場合お娘さんや妹さんの今後の方針について、等閑に附した一寸遁れの處置を決してお取りになられない樣にといふ事です。

二

自宅から通學せられた方達は、其儘家庭にお止まりになられませう。また寄宿舍などに居られた方達は、其の樂しかつた舍を離れて父兄の許へ歸られ、其處でまた昔懷しい爐邊の物語を聞かれる事でせう。そこで當分皆さんは茫然とした生活を送られる中に、三月四月は瞬く間に經過して行くでせう父兄の方達が皆さんの緣談について、話し合つたりして居られるのを、最初皆さんは物珍らしい、併し何と無く怖ろしい樣な氣で聞いて居られるでせう。其間に皆さんはまた裁縫だとか生花だとかいふものをお學びに、其れ〳〵の師の許へ通はれたりせられます。其處でいろいろの緣談の事などを聞きます。恐らく皆さんの中の十中八人位までは、かうした生活をせられるのではありますまいか。私の知つて居る限りの例は例外無しといつてもよい位に其れでした。其れで皆さんの場合は、略ぼ其れだと思つて、私の話を進めます。

かうした生活は、全く皆さんのお母さんや、お祖母さんやの送つて來られた生活の踏襲です。そしてお母さんやお祖母さんやは、其れで大した困難を感ぜず、よい緣談をも聞くことが出來ました。ところが今はどうかと申しますと、決して其れで滿足な結果を見る事が出來ません。先づ最初は澤山の緣談を聞くでせう。併し其の大半は皆さんの要求を滿足させない、もつと言へば、皆さんとは全く沒交渉といつてもよい種類のものである事に、皆さんは屹度驚かれるでせう。が、皆さんのお年齡はまだずつと若いから、此の先き幾らでも申込はある事と思つて、一先づはすつかり其の申込みを斷はり後のよい申込を待つて居られるでせう。が二十一二歳から先きになるとだんだんあせり氣味となります。今度は緣談もずつと數少なくなります。依然として其の申込は氣に入らないが、今度は其れを取逃がしたら大變の事になると考へる樣になります。最後はもう何處でもよい、申込のあつた處へ嫁がうといふ悲壯な氣になります。かうした時に、多少でも氣に入つた緣談を取り逃がしたりした時の失望落膽は、とてもお話出來ないものです。私は其の收拾出來ない失望の場合をいくつも見て居るので、此れは實際重大事件だと思ふのです。

父兄の方達は皆な、「何で近來はこんなに結婚が困難になつたのだらうか」と訝ります。けれども此の現象は決して一時的の變態ではありません。昔と今とでは、家庭の制度がすつかり變つて來たのです。昔は人口の移動といふ事が極めて稀れでした。ですから其の近傍で生れたものは大體其の近傍に生活して居ました。ところが皆さんが鄕里へお歸りになられて周圍を眺めた時に、皆さんは自分の結婚してもよいと思ふ對手を何人數へることが出來たでせうか。中學を出た位の人は、どしどし家を出て都會へ行つて居ます。自分の幼な友達が、今は大抵某會社、某銀行の人となつて、鄕里には居ない事を皆さんはお聞きになられたでせう。また都會の人でしても、電車の中などでこんなに澤山若い會社員銀行員を見るのに、それにしても皆さんの知合の家の關係者に何故其等の若い會社員銀行員の知合が少ないのかと皆さんは屹度訝られた事でせう。處が其れと同じい事を若い男の人達も申して居ります。「此んなに澤山若い女が居るのに、何で自分の知己にさうした人が少ないのだらう」といつて、結婚のよい對手の無い事に苦んで居ります。ではどうしてこんな事が起きたかといへば、全くのところ今の社會では、人口の移動が盛んにな

つたため、お互ひが其の周圍を詳しく知り合はず、漠然とした知合は非常に多くなつた代りに、結婚などの相談をしてよい樣な重大な、家庭的の知合が少なくなつたからです。前半は、皆んなが大いに社會的になつた事を意味しますが、後半はまた其の反對に、家庭的な古い統一が破れて、皆んなが個人主義的にたつた事を意味します。さうした社會のよい惡いは、今の場合問題ではありません。が、とにかく私達の住んで居る社會は、お母さんやお祖母さんの住んで居られた其れと、すつかり性質の違つたものになつて居る嚴然たる事實には、私達は少しも狼狽せずに直面しなければなりません。今漠然として緣談を待つて居るなどは、策の最も下なるものです。四五十年前は其れでよかつたでせう。今そんな仕方でよい結婚を選ぶのは全く、不可能といつてよいことなのです。

三

其れで私は皆さんが學校を卒業せられた今の機會を捕へて直ぐにお話したいのですが、其れは卒業から結婚までの處女時代の見方を、從來とは全く變へて了ふといふことです。十六歲頃から二十三四頃まで、其れは略ぼ十年計りの年月ですが年月は其れ許りでも、女として最も健康な、最も美しい、最も意味の深い、しかも人生五十年に較べて見れば決して短少だとは言へない、其の年月ですから、此れはただ卒業から結婚までへの單なる過渡期だとは考へられてなりません。其れは全く獨立した、或る意味を持つた時代なのです。此れを假りに、學校時代、家庭時代から區別して、社會時代といつてもよろしいでせう。女學校を卒業すれば其の次は家庭だといふ考へは、今後は根本的に撤廢せられなければなりません。『此れからは社會で活動する時代だ。其れが終つてから結婚して、家庭時代が來るのだ。』から考へなければなりません。其れは個人に取つても社會に取つてもどれだけ意味の深い事だか知れないのです。また其れだけでは無く、此れによつて從來の結婚難を救濟することが出來るのです。

處女時代の十年を卒業から結婚への過渡時代と考へず、獨立した一つの社會時代と考へることには、社會の人達の人生の見方が根本的に改新せられる事を必要とするでせう。だから其の爲めにはすべての人達の協力が必要です。父兄の方達も進んで其の見方を取らなければなりません。社會の人達もさう見てやらなければなりません。が、主動者は何といつて

も處女自身です。其れは困難の樣には見えますが、其れによつて自分の生活の意義を深めると同時に、自分の將來の不幸をも排除することが出來るのですから、勇氣を持つて進んで其途を選ばなければならないと思ひます。

此の見方の轉回が出來れば、其の爲めに皆さんは從來とは全く見違つた、どんなに活々した、意味のある生活をする事が出來るか知れません。何時到達するか、また何が到達するかも知れないものを目標として生活するほど馬鹿らしい、また氣苦勞の多い生活はありません。從來の仕方では、たゞ毎日緣談だけを張合ひにして生活して來ました。其れはたゞ結婚への準備時代でありましたから、後に回想して見ても誠に短い、張り詰めたところの無い生活だつたのです、從來の仕方では、處女は萬事に責任心を持つ習慣をつくり得ませんでした。どんな仕事をやりかけて居ても、明日にでも緣談が湧いて來れば其れを根底から拋棄しなければならなかつたからです。そしてまた萬事が消極的で、世間の人達にいろ〳〵の疑惑を持たれないための氣苦勞もしなければなりませんでしたところが今若し此の處女時代を一つの社會時代と見、社會へ出て活動する時代だと考へたとすれば、從來の態度は根底から變へられて來るでせう。すべてが積極的活動的になります生活する事に張合が出來ます。無闇にわきのために氣苦勞をする事も不必要となります。自分で自分を處理する習慣が此時から出來、責任を持つた生活をする樣になります。たゞ焦燥の氣分で結婚の申込を待つて居た從來に比較して、其れは何と云ふ隔段の相違でせうか。

此の見方の轉回によつて、私はまた從來の家庭婦人が稍ゝもすれば陷りがちであつた、社會的知識の缺乏をも救濟することが出來ると思ひます。女學生から結婚へ。此れでどうして社會萬般の事柄についての知識或は少なくも知識慾を持つことが出來ませうか。其れのみならず、或は其れ以上に重要なことだと思つて居るのですが、此の社會時代を設けることによつて、家庭婦人が從來陷りがちであつた個人主義的の人生觀からも脫却する事が出來ると私は思ふのです。個人主義的の道義心から社會的の道義心へ移るには、何としても實際の社會生活を經て來ることが肝要です。今日の家庭はまだまだ大分に個人主義的の着色を持つて居ります。其れは家の建て詰つた、都會人の家庭などでお互に最も切實に經驗することです。其の原因は何處にあるかといへば、家庭の主婦が十

分社會的の道義心を養つて來なかつた事にあると思ひます。

四

なほもう一つ申して置きたたことは、此の見方の轉回によつて、女性は處女時代を處女時代として本當に意味深く生活し、其の生活の楽しみをよく享受し、其間に獨立した各人の人生觀を作ることが出來るといふ事です。すべて生活は他への過渡、他への手段と考へられては、意味深く、また樂しく生活せられるものではありません。處女時代は處女時代として獨立した意味を持たなければならないのです。また現代の女性はまだまだ獨立した人生の見方をつくる事に於て缺けて居ると思ひますが、其れは主として學校から結婚への生活を經たために起つた事です。人生の見方の無い女性は寂しいものです。また其れでは、文明に於て女性が一つの創造の仕事を分擔することも出來るものではありません。文明の仕事を分擔するといふには二つの意味があります。一つは社會的義務として機械的の仕事を相互に分擔することですが、もう一つは、其の文明の統一せられた色彩に一つの新らしさを加へるといふ事です。然るに今の樣に、處女時代が無意義に費されて居たとすれば、女性は本當の意味で創造的となる素地を作ることが出來ません。家庭生活に拘束せられず、社會的活動の中で創造し、鍛錬せられた一つの人生觀の素地を持つて其後私達は家庭生活の中へ這入る樣にしたいものだと思ひます。日本人は餘りにも近眼に實際的である。そして人生觀を悦ばない。其れが日本の文明を、生活を創造的で無く、機械的である樣にして居る最大原因だと私はいつも考へて居るものですが、家庭に人生觀を植ゑつけるために、私は特に若い女性の今後に期待を置きたいと思つて居ります。

最後に此の見方の轉回によつて、皆さんは結婚の機會及び其の選擇の自由を得るでせう。其れは皆さんの環境がずつと廣くなつて來るからです。勿論皆さんは其間に多くの誘惑や困難と戰はなければならない。此れを處理するためには、皆さんは其の社會時代に、品性の高い生活をして居る家庭の幾つかと次第に近づきとなり、其の人達に自分の生活を公開して居られるが宜しいでせう。かうして居られれば皆さんは屹度本當に心から滿足の出來る結婚 得られるに相違ありません。私は今の機會に皆さんに切におすすめしたい。勇敢に社會へ出て職業を得なさいと。……………

子孫創造の問題

一男子

産兒調節の問題は、前號にも奥むめお氏が書いてゐられる。その論旨に對して私は全然同感であり、從つてその文中に引例された吉岡彌生氏の言に對しては唯驚くの外はないのである。

だが、兩女史の意見とは全くかけはなれた立場に於て、子孫創造の問題について一言させて頂きたい。

私は、子孫創造の事業を極めて神聖なものと昔からも思ひ今も思つてゐる。だが、現實に於てその失敗者である。第一に女房をめとる時にその家の血統に對する注意が足りなかつた。尤も、惡疾などはなかつたが、女房の母はあまりに凡物でありすぎた。それが隔世的に私の子供に遺傳してゐる。それから女房の父は頑健で賢明であつたけれど、若い時に性病をわづらつたかと思はれる節がある。それがためかあの強健な兩親の子が揃ひも揃つて長命しない。私の女房も既に過去の人となつた。從つて、あの兩親の孫にあたるものは、皆な健全だとは見受けられない。尤も、世間並に見て普通の子供かも知れないが、かくの如き子供が多數を占めてくれては、われらの將來は實に慘たるものであらうと思はれる。かくの如くにして、私は失望してゐる人間である。顧みて、私自身について云へば、世間の人々が壯氣を失ふべき年齡に達してゐてなほ頭腦は新鮮であると自覺してゐる。また、生來嘗て性病に犯されたことがない、身を持することは謹嚴であつた。幸にも、私の知つてゐる限りに於ては、先祖以來傑物が出てゐる。だから、どうかして私の祖先傳來の血液を子孫に遺傳させておきたい。即ち、あまり恥しくない子供を將來にのこしたい。優生學から見て、その積極行動に出でたいのである。

もう、世の中のあらゆる辛酸もなめて來た。讀書に於て、思索に於て、體驗に於て、而して、内に充つる意思的實行力に於て、私は健全な一男性として子孫を創造し得る資格を得てゐると自信する。たゞ、この上は現在の家庭を破壞せねばならぬといふ困難がある。けれども高貴な子孫創造の大業の前には、それは敢然として打勝つべき小難關であらう。

世の中には、私などゝ感を同じくしてゐる男性や女性も少なからずあることであらうと思ふ。(五、二〇)

(十頁よりつゞく)

によつて企てる時には、實に前途洋々たるものがなくてはならない。國内的に天然資源の貧弱であることなどは問題でない。資源は世界に求めたらいゝのだ。從つてその畫策も努力も必ず全國民的でなくてはならない。一政黨の我利的根性によつて私さるゝやうでは國運に危しといはざるを得なくなる。殊に浮草のやうな通貨政策でやられてはたまつたものでない。國家の將來に對し深憂を禁じ得ないまゝ一言を述ぶ。

(一九二七、五、二〇)

罌粟の花

英美子

朝さいて
夕べに散る、罌粟

咲くときと同じ力で
散ることの出來る
罌粟——

ほろ〱と、こぼれた花に
あゝ、ひとすじの紅と
強い〱信念を
私はみた。

或る朝のストリー

輝やかしい朝の
光のなかで
あさり屋が、氣が狂つた。
彼は、だしぬけに
とんきやうな聲を張りあげて
『賣れないヨー』と
叫んだのだ

みんな、笑つた
樹の葉まで、重なりあつて
さわ〳〵と、笑つた

この朝の、献立表には
眞靑なパセリのことは
書いてなかつた。



雜信

水守亀之助

奥むめおさん。

お約束をしながら、いつも書けないで失禮してゐます。忙しい上に、頭腦を惡くしてゐますので、何も書けないのですせめて、一週間位どこか山の中へでも行つて寢ころんで來たいのですが、なか〳〵さうは參らぬので閉口です。

あなたの御精勵と、御奮鬪はかげながらお噂を聞いて敬服してゐます。少しも不純な感じや、浮誇、驕慢の感じのしないあなたのことですから、たとえ、やり方はぢみでも一歩一歩と主義主張を實行し實現して行つて居られるのだらうと、門外漢の小生も窃かに祝福してゐる次第です。

近頃、文壇の方でもなか〳〵喧しい論爭が流行してゐるやうですね。小生はそれ等にも眼を通す暇がないので、すつかり門外漢になつてしまつて、まるで無智識なんですが、昨日あたりから机邊にあつた二三つの雜誌をとりあげて、みだしの面白さうなものを選んで拾ひ讀みをして見ました。なかなか面白いと思ひました。

『新潮』の平林君の『文學の本質』についての檢討は例によつて明快透徹、純客觀的、科學的の態度でぴし〳〵と片づけて行くところ、實に氣持よく讀みました。文學にアプリオリ

を否定し、社會的條件がいろんな風に文學をも變更させてゆくのだといつた風の見方で、批判してゐるやうです。そして文學がさうなるといはないで、文學がさうさせられるといふべきだといふ解釋の下に現下の文藝上の戰線の諸現象を快刀亂麻を斷つが如き筆法で片づけてゐるやうです。

　社會史的に見れば、いつの時代の文學もそれで片がつくわけでせうが、小生等はまだ個人主義的教養をぬけきれないで非科學的の空想に耽り易い人間であるせいか、さうさせられる人間――藝術家――の個々のいろ〳〵の現はれをも興味をもつて眺めずにはゐられません。政治鬪爭の必要から文學を利用するものも、また、反對に藝術至上主義を固守するものも、大勢は兎に角、皆なが矢張、さうさせられる上にも、いろ〳〵變つた現はれがあるところに個々人の面白さが感じられるのです。それも、矢張、さうさせられる條件が社會的にちやんと備はつてゐるからではありませうが、しかし、社會的條件のみに支配されない、いや、支配されながら各自變つた現はれをとるところに、二二が四で割りきれない、環境、教養、生活で律しられない、何かゞあるのぢやないでせうかかういふと神秘說だといつて笑はれるでせうが、そこが小生にはまだあやふやなのです。

　尤も平林君はある程度迄、さうした疑問をも解いてゐてくれますが、兎に角、小生なぞもつとよく考へなければならないと思つてゐる次第です。

奥さん。

　近頃うるさいのは例の一圓本の豫約出版ですね。やつと下火になつたやうですが、小生はだん〳〵嫌氣がさして來ました。餘りに醜い競爭が劇しいのと、文化事業だの何だの看板だけを立派にして、それを餘りに利用し過ぎるからです。底を割つてしまへば、皆なが皆な單なる我利々々亡者に過ぎないぢやありませんか。

『自然は眞空を恐れると言はれてゐるが、丁度それと同樣に資本は利潤なきところを恐れるのである。適當なる利潤があれば、資本は極めて大膽である。一割の利潤が確實であれば資本は何處に於いても充用され得べく、二割の利潤があれば活潑となり、五割の利潤があれば積極的に大膽となり、十割の利潤があれば人間の定めた一切の法律を蹂躙し、三十割の利潤があれば如何なる犯罪をも顧慮せず、所有者が死刑に處

せられる危險をも顧みないのである。若し混亂と紛擾とが、利潤を齎らすとすれば、資本は自由にこれを奬勵するであらう。』

これは高畠素之君が『マルキシズム概說』の中にひいてゐたイギリスのダニングといふ人のいつた語ださうですね。小生は非常に面白いと思ひ、實際さうだと思ひました。

かうなると資本主義位危險思想はなく、また人間生活を害ふものはないといふ結論が生れるわけぢやありませんか。

そして、この資本の跋扈跳梁はいよ〳〵益々劇烈になつて來つゝあるやうです。太平の逸民たる小生如きも心痛まずにはゐられません。

つまらぬ偶感を書きつけました。埋め草にもなれば幸甚です。

皆さんの、健康をお祈り申します。　――五月十六日――

途上

―おく・えいち―

『あら』
『あら』
あわたゞしい銀座の人込の中で
行き過ぎた四つの目が振返つた。

『隨分暫くねえ』
『十年ぶりだもの』
互に小皺のよつた鼻の先が
吸ひ付きさうに近づいた。

男にとつては始ての女
女にとつては始めての男
一緒に墓穴まで喰付いた筈の

だが、機會と云ふ惡戯者が氣嫌を惡くして
指一本觸れさせなかつた爲めに
彼女の傍には
餘り折目の正しくない背廣服が
彼の傍には
未だ新しい小學生のユニホームが
怪訝な顏をして立つてゐた。

『では御達者で』
『では御達者で』

慇懃に御辭儀した時代遲れ二つの顏が
初夏の輕快な裝ひを凝らした
モダーンボーイとモダーンガールの陰へ
賴りなさうに消えた
此世の果てと果てへ

婦人勞働運動の諸問題

赤松明子

我國の產業に於ては、纖維工業が重要な位地を占めて居るので、婦人勞働者の數が非常に多く、全工場勞働者の約五割を占めて居る。故に婦人勞働者の組織運動は、現在、凡ての婦人運動中最も重要なるものであつて之れの成功不成功は全勞働運動に重大な關係を持つて居る。然しながら、何れの國に於ても婦人勞働者の組織は、男子勞働者のそれに比して、幾層倍もの困難を伴ふのが普通一般の狀態である。それには種々の事情がある。例へば、婦人勞働が一時的性質を有し、生涯勞働者たるものが少いこと——卽ち工場生活を嫁入りまでの腰掛けと考へるものが多いこと——婦人勞働者の知識低く、利己心强く、猜疑心深く、共同利害に對し無關心であること、久しきに亘る封建的家族制度の餘響に因る社會意識の不足、婦人の勞賃が低きに失して組合費支辨が困難なこと、雇主側に於て威壓が行はれ易いこと、婦人勞働者の組合運動に對する男子組合の不熱心及び或場合には反抗運動の行はれたること、この外に特に我國に於ては婦人勞働者の年齡が著しく若きこと、寄宿制度の存在等が婦人勞働者の組織運動を一層困難ならしめてゐる。こゝに一つ最も注意すべきことは我國の婦人勞働組合は、殆んど凡て、男子勞働組合の婦人部として男子勞働運動者によつて組織されたものであつて、決して婦人勞働者自らの自覺と要求とによつて生れたものではない。その必然の結果として、各勞働組合の婦人會員は、二三の優れた鬪士を除いては、殆んど凡て組合の事務に無關心であり、唯だ男子のいふがまゝに行動するだけである。その

中の比較的自覺ある者が、會費をきちんと支拂ひ、大會その他の集會に出席はするが、彼等と雖もその多くは、自己の意見を發表するのでもなければ、他人の意見に修正を加へるのでもなく、たゞ默々として席に列つてゐるのに過ぎない。勿論、婦人勞働者組織に積極的に活動するやうな婦人を見出すことは非常に困難である。さればといつて之れをこのまゝに放置することは出來ない。こゝに於て、私は、過渡的又は補助的要素として、時間と知識と熱情と誠實を持つ知識階級の婦人が蹶起して、婦人勞働運動を支持するの必要を感ずるのである。後進國たる我國に於ては、婦人勞働者を組織するに當つて、現在、之れが最も有効であつて、また最も妥當なる道程であると信ずる。この點に就いては英國の婦人勞働組合聯盟が好箇の範を垂れてゐると思ふから、參考までにその一部を記述することも强ち無益ではないと思ふ。

一八七四年七月に、「同情を持つてる紳士淑女」の會議がロンドンに召集されたが、その結果婦人勞働組合聯盟の生誕を見たのであつて、その會員中には知名の士が多かつた。そしてかの有名なパターソン夫人が名譽書記に任命された。この聯盟は、中産階級の同情者の團體であつて、純然たる勞働組合ではない。その目的は勞働婦人の間に勞働組合主義を普及することであつたが、その政策は決して雇主に敵對するものではなかつた。彼等は、同盟罷工を未前に防ぎ、調停を發達せしめて行くことを以て、團結の利益の重要なものに數へた尙ほ聯盟は、組合の創設費を調達したり、事務所に對し適當な金額の融通を圖つたり、餘暇ある人々を臨時の書記として働かせたりした。又聯盟は、半片銀行、婦人勞働紹介所、勞働者レストラント、海濱住宅、水泳クラブ、巡回文庫、協同組合賣店、等の共濟的事業にも意を用ひた。而してこの聯盟の一大特徴とも云ふべきは徹頭徹尾婦人の自主自立を旨としてゐることである。かくして多くの婦人組合が聯盟によつて組織されたが、製本女工組合、婦人家具製造工組合、マッチ製造工組合、一九〇六年の全國婦人勞働者聯合會等はその最も有名なものであり、且つ成功したものである。其後聯盟は漸次社會主義的色彩を帶びていつて、一八八六年の年次集會に於ては、社會主義的な決議案が通過するに至つた。そして婦人諸組合の會則は爭議手當を含むやうに改正され、聯盟は多くの爭議に際して、爭議基金の募集に盡力した。一八八〇年代に於ける有名なるマッチ製造工のストライキが異常の成

果を收め得たのは、一部分は聯盟の助力によるのであつた。

この一八八六年の動議を通過して後、聯盟は固く勞働組合的立場を守り、遂には勞働組合界に於てその公認的地位を獲得するに至つた。今日では婦人勞働組合聯盟は、勞働組合總會總務部の一部となつてゐて、之れに加盟してゐる勞働團體の數は約百團體に及んでゐる。

英國の婦人勞働運動は約百四十年の長き歷史を有するものであつて、その進みかたも一歩は一歩へと順調に健全な歩を續け、今日の牢固として拔くべからざる位地を築きあげたのである。そして婦人工場監督官の任命、最低賃銀の獲得等未だ我國の男子勞働者さへも獲得していない諸種の利益を享受してゐるのである。然し我國の如き後進國にあつては、英國の婦人勞働者の採つた道を進むことは許されない。我國の婦人勞働運動は、他の社會運動が過去に於てさうあつたやうに、飛躍的發展を遂げて、他國のそれと步調を揃へて行かなければならないやうな特殊的立場にある。そこで我國の婦人勞働運動は、男子勞働運動者並びに知識階級婦人の協力を非常に必要とする。その結果、既に述べたやうに、我國の婦人勞働運動は、男子勞働組合の統制下にのみ發達してきたやうな變態的形態を採るに至つたのであるが、こゝに一つの危險がある。婦人の引込思案と依賴心とは凡てを男子の手に委して、婦人自身の奮起を必要とするやうな場合、例へば婦人の坑內勞働禁止、婦人夜業の撤廢、婦人工場監督官任命、寄宿制度の改善等の如き特に婦人に重大な關係を持つ問題に關しても、常に受動的消極的であり、或る場合には無關心であることさへある。婦人勞働運動の理想的形態は、婦人自らの自覺と要求とによつて生れたものでなければならぬ。また婦人勞働者解放の根本的條件は婦人勞働者自らの力に依らなければならぬことは云ふまでもない。然し我國現下の婦人勞働運動の進むべき道は、男子勞働運動者並びに知識階級婦人の助力を借りる必要あると共に、婦人の自主的立場を失はないやうに細心の注意を拂ふ必要がある。それがためには、婦人勞働者の中に、優秀なる婦人勞働運動者を養成し、訓練して行くことが刻下の急務である。私は、今日の場合、英國の婦人勞働組合聯盟のやうな、男子勞働運動者、知識階級婦人、婦人勞働者等よりなる一つの協議會の如きものが生れることの必要を痛切に感ずるのである。

私の住む村の女

岡本利吉

理窟めいたことよりも、現實を觀察して頂きたい。どうにかせねばならぬことも、理窟ではなく、現實であります。改めねばならぬことも、心配せねばならぬことも、考慮せねばならぬことも、みな現實でありませう。

× × ×

では理窟の必要はありますまいか。そも〳〵理窟とは何でせう理窟の本質を知らず、理窟をいふ人を、俗に理窟屋ともうします。

理窟の本質。とんでもない理窟になりました。が、一言それを云はして頂きます。

理窟は自然科學に存在します。人生問題にも存在します。社會理想がまた、人間といふ遍通の心理に出發してゐる以上社會理想にも理窟が存在します。世間で俗に社會科學といふは、人間に遍通する心理に出發しての社會理想といふ意味であります。ですから、人間性に共通がなく、各人別個の心と感情を持つものでしたら、人間にも社會にも、理想と名の付くものに理窟は存在し得ないのであります。理窟は所詮、遍通の自然現象、もしくは心理現象――その中に理想が包まれる――であるに行き詰まります。

もつと理窟のことを詳しく申上げたいが、それではあまり理窟ぽくなりますから、これだけで失禮。

× × × ×

私の住む村――私の村ではありません。私は理想を抱いて共働村を建設しつゝあります。私の理想は、遍通の人間心理に基くと思ひますので、私の理想は、私だけの理想でなく、遍通な人間の理想、すなはち理窟からの結論であり、社會科

學の煎じ詰つたものであると思ひもしますが、それを強く主張するには、異論者もあらうし、社會科學の冒用だと叱る人もあらうし、否、遍通の人間心理に基くから、私の方が理窟だ正しい、理想だ、純正社會科學だ、いや、違うなどと、論難しあはなければならなくなるかも知れませんが、閑人でない私は、其煩に耐へ切れませんから、理窟を抜きにし、私の村のことはいはず、私の住む村の女の話を、それも、事實談として云はして貰ひませう。

× × × ×

私は靜岡縣駿東郡富岡村葛山に住んでゐます。今川義元時代には、葛山備中守といふ偉い大名が居城を構へたといふ土地柄で、其人の家老屋敷など、今でも外廓を殘してゐます。當時は中々盛な都邑であつたさうですが、今は淋しい山里であり、土地の人は百姓をして、俺が備中守の家來の子孫だと意張る人もゐません。

富岡村として人家が七百ばかり、大地主もおり、大阪から岩下清周氏が來て不二農園とかいふを開き、借金王石井定七氏とかも別莊を持つてゐるといふ、淋しいようで案外豪勢な村であるが、その豪勢は佐野驛に近い御宿部落までのことで葛山部落は、荒寥と閑寂が、水の流れない谷を夾で向き合ふてゐます。

葛山の土地は、御宿の地主と、藤澤や御殿場邊の資本家に取られ、廣い廣い山林も禿山も、部落の人の名前になつてゐるものは、殆んどないといふてい丶位い惡い、境遇に置かれてゐます。ですから、山や材木の賣買があると、村人が集まりたかつて、食はうとする、勞力の提供を强請したり、村道を通るにも苦情を付けたりするとかで、隣の深良村と並んで駿東郡でも人氣のよくない處だと、近隣の金持階級はいふてゐます。私は葛山の人が、そうなることを、寧ろ當然だと心得て、大膽にも其の渦中に身を投じ、禿山を少しばかり買取つて、共働村と農村開拓の人間學校を建設して見ようと決心し、着々とその現實にぶつかつてゐます。

× × × ×

葛山に井上寛君といふ家があります。百姓に似ず文字の讀める人で、——書くことはできません——釋迦牟尼會とかを構らへて富岡村の入口へ道場を建て丶ゐる定光とかいふ僧に佛書を教へられ、理窟も中々よくいふ人があります。經濟狀態は、そう申しては失禮だが、貧困の部類に入るほうでせう

だが村では知識階級へ入る一人でありますから、まづ葛山の標準的家庭と見て、井上君の妻君と妹さんのことを少し書かして貰ひませう。

× × × ×

私が井上君を知つたのは、買ひたいと思ふ山を見せて貰ふときでした。ある日の朝おたずねすると、その日は部落共有の茅山の刈取日なので、はや仕事にでられてゐました。妹さんが案内して呉れるといふので、そのご好意を受けることにしました。

十六七歳の娘さんです。東京ならば、樂しい空想などに耽つてゐる、いゝ年頃です。葛山の娘さんには、私共から見てそうした年頃がないほどに、現實生活に沒頭して見へます。でも氣立のいゝ、すなほな娘さんだと感じました。

娘さんは素早く身仕度をして呉れました。でも着物を着替へるでなし、そのまゝの着物の裾を締め上げて、山足袋を穿き、――むろん長い袖などは、平生からありません。馬屋の方へ行き、馬を曳きだして、鞍と荷綱を用意し、私よりも先へ出かけました。里道から山道、中々急な處もあり、山馴れた私でさへ、息のはづむを感じながら、ものの一時間も上つて、やつと茅刈場へ着きました。井上君は私を迎へて呉れ、もう晝の時刻だと、用意の薩摩芋のふかしたのを私にも分けて呉れました。娘さんは、それさへ食べず、井上君から刈りた茅の大きな束を四つほど馬に付けて貰ふて、また山を下りはじめました。下りしなに、井上君は、茅を卸したら、急いでもう一遍上つて來いといふのでした。娘さんとしては、激しい勞働であると、私は感心してしまいました。

待つてゐる間に、また馬を曳いて上つて來て、茅の束をつけて貰ふて、また下りました。無言で上り下りするその娘さんの後姿を見て、私は或る氣持を貰ひました。こうした現實な生活を、毎日繰返へしてゐる娘さん、世間では此等の娘さんのことを、問題にせず、念頭にさへ置いてゐないが、本當の職業婦人として、全國に幾十萬といられる。こうした娘さんだちの爲に、何かを考へて上げる必要はなからうかと、つくづく感じさせられました。

都會のモダーンガールや、唇の朱い新しい文學ガールや、それに類似したいろ〳〵の女性の爲に、創作を書いて上げたり、ラブレターを書かされたり、女性解放の合棒になつて上げたり、親切な多くの青年があるが、村の職業婦人の爲に、

幸福を心配して上げる人はなからうかと、つくづく考へさせられました。都會のモダーンガール等々は、ブルジョアもしくはプチブルの出身でせうが、惱める、惱みさへ知らずに、生活の現實に沒頭してゐる純プロレタリア娘のことを、たまには考へて上げて下さい。

× × × ×

井上君の妻君も、中々働き屋です。八つを頭らに、五人ほどの子供がゐます。生活は極端に簡易にしてゐて、炊事なども、馬を曳いた妹さんがしてゐますが、妻君は農繁には井上君よりも激しく働き、農閑には馬を曳いて奥山へ、ら宇竹など切りに行きます。井上君も勞働は激しくする方であるが、知識階級としての飛び歩きが多い爲め、妻君と妹が生活費の過半を稼ぎだすらしいのです。でもありませう、男女同權程度の家柄でして、井上君は家事には一向に頓着してゐないらしく見へます。之も都會の人が考へねばならぬ一でありませう。

農村の中流以上の家庭では、女は生活的には男に寄生してゐます。中流以下、もしくは貧しい小作人の家では、主人よりも女の方が重荷を負ふてゐるところが少なくありません。」

井上君の家も共一軒でありまして、妻君も妹も手を安めず、夜も遲くまで、らう竹を切つたり、皮を削つたりしてゐます馬につけて都會へ賣りにゆく仕事も、大てい女の方でします

× × × ×

衣食住の生活それのみに沒頭することは、理想ではありませんが、まづ食はねばならぬ必要から、中級以下の人々は、なんと其日に逐はれてゐませう。職業婦人は現實に、こうした生活の營捉を毎日うけて、其他に眞の人生あることを忘れようとしてゐます。しかしブルジョアやプチブルの家庭から拔け出た成績の善いモダンガールでさへ、生活を衣食住より以上の處に見詰めてゐませうか。中産農村の婦人寄生虫など問題でありません。覺醒といふことは、果して誰が叫び、誰にどういふ方面を指示すべきでせうか。實に之が根本の重大問題でなければなりません。私は只だ私の住む農村の小さな現實を申上げ、こうした大きな問題に向ふ、幸福な都會の人々に、生活にばかり逐はれてゐる村の女のことをも考へて下さるよう、お願ひしたいと思ひます。

婦人界近事＝開地敏子

夫の貞操義務

去る五月十八日、社會の掃き溜めである東京地方裁判所の司法記者室で、各新聞社へ電話の御用が頻りにある。

何事かと思つて聞いて見ると『素敵に新らしい判決が下された』と云ふ話『什んな判決ですか』と好奇心を燃やし乍ら聞くと『大審院で今日夫にも貞操の義務ありと云ふ目新らしい、婦人に有利な判決が下されましたよ』との答、私つらつら思へらく、舊道德は扨て置いて、私達の所謂新道德觀では、妻に貞操の義務があるならば、夫にも當然貞操の義務がなければならぬ、だが悲しいかな日本の法律上は勿論道德上でも從來は婦人にのみ貞操を強いて、男子の貞操は全然無視されて來た關係上、法律上に於ても婦人が姦通すれば懲役二年以下と云ふ刑法上の制裁があるが、男子の場合は其相手方の女が『有夫ノ婦』――法律上の夫婦關係者でないならば姦通罪は成立しないと云ふ差別待遇がある。

註　勿論姦通罪は民法第百八十三條第二項に『前項ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス』とある樣に告訴をしなければ問題にならぬ、亦告訴をするには離婚手續後でなければならぬことになつてゐる。

だから男は妻を持ち、他に何人の女と關係同樣仕樣とも相手の女が『有夫ノ婦』でない以上は舊道德から云ふと、それは男の甲斐性だと結構な特權が與へられてゐた。

否寧ろ女の嫉妬深きは去るなんて女大學はそれを離婚原因の一つにさへ許容して來た、途徹もない話である。

だが婦人も道具視されることから追々と人間視されるにつれて、嫉妬が離婚原因なんては笑止の沙汰と考へられる樣になり、大正十五年七月廿日、大審院長の横田秀雄氏が始めて『夫ニモ貞操ノ義務アリ』と云ふ新判例を開かれ、從來夫の貞操を認めないのは――民刑法上の男女差別待遇は――『主トシテ古來ノ因襲ニ胚胎スル特殊ノ立法政策ニ屬スル規定』と喝破されたのは痛快至極であつた。

此の宣言に對して法律家は勿論アット驚き、思想家はさもそうずとばかり拍手したものであるが、去る五月十八日いよいよそれが裏書きされた。

事件の内容は至極ありふれた、次の如き男女の情的問題にからまる問題なのである

× ×

大分縣直入郡竹田町に和田すみと云ふ娘が住んでゐて、年頃になつたものだから熊男と云ふ婿養子を貰ひ三人の子供を産んだにも拘らず、夫の熊男は妻子を捨てゝ家出し、近村の資産家の寡婦である渡邊りよと云ふ家に下男に住込中、りよと關係して同棲生活を結んだ。

和田すみは三人の子供を抱えて手許不如意な所から、夫に少し何とかして貰ふ心算で、同じく大分縣竹田町二三竹内辯護士方の佐藤鶴喜(四二)に掛合つて貰ひ結局手切金一百圓と子供の教育費一ヶ月九圓宛五ヶ年間仕送ると云ふ契約書を取つたのだが、其際佐藤鶴喜は若し契約を履行しなければ姦通罪の告訴をすると恐喝したと云ふので――法律上は此場合は渡邊りよが『有夫ノ婦』でないから姦通罪は成立しない――熊男りよから逆に恐喝の告訴を提起され一審二審の

裁判所ではそれは恐喝罪として佐藤に有罪の判決があつたのを不服として、東京へ上告したところ大審院の事實調べあり、辯護人が『佐藤の行爲には多少不穩當な點もあらうが、女は男を奪取られたのであるからそれは犯罪ではなくて、權利の實行である』と辯論したのを最もとして、隣男及りよの行爲は民法七〇九條、七〇、一〇條の不法行爲に該當するものとして、佐藤を無罪にした。即ち相手方に對しての手切金及扶助料の請求は恐喝でなく權利の實行である。夫にも貞操義務あるは勿論でりよにも共同の責任を負ふべきものであると云ふのであつて、つまり婦人の地位が法律上に於ても平等に認め出された一つの好適例で、イギリスに於ても最近までは、日本とほぼ同樣の差別待遇をやつてゐたが、一九二三年以來、夫の姦通も妻の姦通同樣に離婚原因になると云ふ制度に改正され、アメリカのカンサス、シチオ裁判所では更に『妻は其夫を奪ひその返還に應ぜざる女の生命を取る權利あり』と云ふ素敵な新判決を下し、さすがにアメリカだと世界の視聽を引いてゐる。

日本にも斯う云ふ新判例が出たら、無暗に金のありさうな紳士を誘惑する藝妓モダーンガールは大恐慌を來し、期せずして風紀取締が出來、西久保市長の好きな質實剛健な民風が喚起され樣と思ふ。

私達から考へると、夫ニモ貞操ノ義務アリと云ふことは、夫婦生活が人類の幸福を意味するならば、あまりにも當然過ぎる位當然なことであるのに、大審院の此判決に對して大騷ぎで新奇の眼を見張るとは何と云ふ道德律の低いことであらうか。

これは要するに男女の自覺が足らぬのであつて、とりわけ婦人は權利觀念を排斥する封建の遺習に捉はれ正當なる權利行使をなし得ないことが慣習となつて法律上に不利な立場となる、即ち我々は現在法律によつて支配されてゐるとは云ふものの、法律の爲の社會ではなく、社會の爲の法律であつて、社會が法律を產むのであるから、婦人が先づ社會的に目覺めて來れば自然法律上も男女の差別を撤廢する、法律が不備であると云ふのも、制度が惡いと云ふのも、窮極すれば婦人に力が足りない結果で、婦人に充分實力が備はれば、歐洲戰亂後の諸外國の樣に、婦人の地位は求めずとも與へられる。

總ては實力である虛名ではない。

御互にモット大地にしつかり足をつけて一つ大きな深呼吸をして見樣ぢやないか。

× ×

藝妓屋の指定地問題

太田前警視總監が辭職間際に臨んで、東京府下の大井、大崎、赤羽、多摩川、淀橋（十二社）平井、蒲田の七ケ所へ、二業（料理屋と藝妓屋）を新らたに指定地として許可し或は舊指定地の範圍擴張を認可したと云ふので、社會風敎上由々しき大問題なりとし、東京婦人聯合會では猛烈な反對運動を起すことになつた、その委員會の席上、久布白落實女史は此問題に就いて警視廳へ談じ込んだ所、警視廳の曰く、

『此許可を申請して來た者は合計三百七件もあつたが、其中で僅に七件だけ許可するに止めた當局の苦衷を察して貰ひ度い、御此許可に反對の聲をきくのは今が始めてだと言はれて驚いた、就いては之が善後策を講じたい云々』と云はれてゐる。

然に目のない地主連中や、利權を漁るに

汲々たる代議士連中や・或は其部下が反對しないのは當りまへぢやないか、それ等をよい事にして三百七件中七件だけの許可はお手柄だと鼻うごめかすとはもつての外だ

社會風敎上に弊害があるゝ認めて、歷代の警視總監が握り潰して來たものを何を戸迷ひして、辭任間際にそれを許可せねばならぬのか、其處に私達は疑はざるを得ない多くの謎を抱く『飛ぶ鳥もアトを濁すな』と云ふ諺があるのに、これぢやその逆で、アトは野となれ山となれ式だと云はれても太田總監は仕方がないだらうぢやないか、勿論これは太田總監一個人の意見ではなく情事情實が關聯してゐることは重々察しはするが、歷代遣ろに躊躇せればならぬ樣な害のあるモノならば、一層誰にもやらないのが本義ぢやないか、お情けで一切や二切やるからこそ續々と申請して來ることになり、從つて裏面に醜怪な運動の暗中飛躍が行はれて、往年の大阪松島事件の如き問題を仕出かすことになる。

今度の七ヶ所の指定地認可の裏面にも醜聞は醜聞を產んでゐる。

實に苦々しき次第であるが、此問題に對して婦人連が率先して反對運動を起したことは誠に喜ばしい。

喜劇 社長サンの出發

登場俳優 ── 奥むめお
脚色者 ── 開地敏子
舞臺裝置 ┐
撮影監督 ┘ ？ ？

社長サンとのみ云へば何處の何會社の社長さんかわかるまいが、職業婦人社のグループでは奥むめお女史のことをじやうだんに社長さんと呼んでゐるから此場合は勿論奥女史の代名詞とお考へ下さい。

其社長さんが二十一日の晩の午後十時ごろヒョコリ私の家に出現し給ひ、「今晩泊めて頂戴』との御托宣、さては家庭爭議の餘波かと早合點して聞いて見ると、實は二十二日から神戸で開かれる女敎員大會に社長さんが出席するに就いて、帝國敎育會からの注文で、女敎員の部分勤務制の可否問題の載つてゐる「婦人運動」を千五百部ばかり増刷して大會に持參の筈のところ、急いで氣を利かしすぎた印刷屋が、新規の製本屋に製本を任命した所が、あとでその製本屋の所在をぐる〳〵探しまはつても分らない。結局屆けて來るまで待つより外なくなつて、明朝七時三十分に出發を有期延期したから「明日は五時に起きて印刷屋へ本を取りにゆき、什うしても七時三十分で出發せねばならぬ」と宣ふので二人枕を並べて寢た。翌朝、

パッチリ目を開けた社長さんの曰く、

『今何時頃でせう』あいにく私の時計も社長さんの時計もサボタージュで時間不明、下のおかみサンに『今何時頃でせう』と聞くと、おかみさん寢むい眼をこすり乍ら、

『七時十五分前』それを聞いた社長サン、素破大變と飛び起き顏洗ふ間もこれぢやありやしないとばかり、二人は用意もソコソコに外路へ飛び出すと七時だと云ふのに、あたりは森閑としてゐる、そこで社長サン曰く、

『私の近所では七時と云へば、みんな起きてゐるのに、此處は東京の中心地日本橋では白河夜舟、呑氣なものねエ』

併し私達は呑氣にはやつて居られぬ、七時三十分出發には殘り三十分、歩いてゐては間に合はぬ、淸水の舞臺から飛び下りたつもりで自動車で印刷屋へ馳せつけ東京驛までゆきませうと相談一決、本石町角の圓タ

クステエーションに飛び込み、
『くるまをはやく』と怒鳴りながらフト時計を見ると正に五時二十分、
戸口は開いて居たが、運轉手は干がれいの樣になつて寢てゐる。
『アラ此處の時計五時二十分よ』と私が云ふと社長サン。
『止つてるのか知れない。聞いて御覽』
で『此時計止つてやしない』と聞くと、運轉手『否』と只一言、それを聞くと社長さん、
『それぢや自動車に乘る必要なし』と云ひ乍ら表へ飛び出したから私も社長サンについて飛び出して見ると、社長サンヨボヨボかの爺サンをつかまへて『今何時』と聞いてゐる、爺さん曰く『何時か知らぬが停車場へゆけばわかります』此挨拶には二人共ギヤフン、自動車屋の時計が不安でたまらないので、今度は牛乳屋サンを捌まへて聞くと『サア私の家を出たのが五時ですから、五時半頃でせう』これでヤツト時間に折紙がついた、今度は悠々と印刷屋へ乘り込むと雜誌は出來上つてゐたが、千五百册持つのがサア大變、どう仕樣電車の停留場までは遠いし、圓タクは見えぬし右せんか左せんかと小田原會議の眞最中折よく走り來た る自動車一臺、早速呼び止めて景氣よく東京驛の玄關口へ乘りつけ、雜誌を手荷物として預け樣としたが包裝がないから預からぬ、時を見ると正に六時半、まだ一時間の餘裕があるを幸ひに、私の家にバスケットを取りに逆戻りの途中、氣の付いた事は、いつの間にか鈴木女史秘藏の洋傘を奥女史が拜借に及んで來たのが行方不明、いつ何處で落したのかわすれたのか、私しが印刷屋へゆく頃まで持つて居たことは事實なのだが、それからがトンとわからない、社長樣と顔見合せてオヤ、オヤ、オヤ、鈴木女史は損害賠償の訴を起す樣な人ではないから其點は安心して兎に角私の家まで歸り、奥女史は再び東京驛へと家を出られた。此處までは私の責任範圍で、扨て社長さんが此つゞきを書く替りに社長さんからのお便りを此處に引用して尻を結ぶとザット次の通り。

『社長サンよりのお便り』――第一便

『行方不明の洋傘が、待合室にちよこなんと人待ち顔でころがつて居ました、まるでウソの樣な話ですネ云々』

――第二便

『ゴシップ種の追加を一つ、札口の前でいくら待つても待つても札を始めぬので、内心ソロソロ氣をもんでゐる内にとうとう發車時刻七時半の五分前になつた。とうとう思ひ切つて聞いたら、モウみんな乘り込んでゐますよにはびつくりしたぜ』

社長サン大阪へ出發の巻第一巻の終りと致します。――敏子

扨、喜劇「社長サンの出發」は、二十六日朝社長サンが頰を腫らして、蒼い顔に氷嚢をあてた姿もいたはしく、自宅に入る光景で大詰めになります。

曾つてその出立を見送らせた事なく、歸着の時間を知らせて來た事のない社長サンが瓢然と歸つて來るのはいつもの事にて驚きはしませんでしたが、神戸へ着く早々、否、出立の汽車の中から口の中が腫れて痛んで苦しかつたと云ふのです。まるで神戸迄寢に行つたやうなものだ、と笑ひながら社長さんは、今臥床に横つてゐます。

社長さんの齒の痛みが早く癒る樣にと祈りながら、筆を措きます(二十七日、千代子)

わが家庭婦人の立場

曾根野松子

前號「家庭の囚人より」を讀んでの家庭人としての私の感想を書いて見る事にする。唯、書いた物が、同記事の筆者に對して禮を失する事になるかも知れぬが、それは年長の同性の老婆心として平に御容赦に預りたい。

私が結婚したと云ふ噂を聞いた友人の誰彼は、まさかと云つたさうである私が長男を生んだ時恩師は寧ろ奇蹟だと評されたさうである。私を知る程の人々は、私が家庭に入ると云ふ事をば惜しんでくれ、危んで呉れ、憐んでくれ、嘲笑して呉れた程、家庭生活には不向きな私だつたのである。

其の私が、とにもかくにも二十年の結婚生活を經て、今や夫婦道の上にも何かしら渾然たる明るい世界を覗かうとし家庭生活の醍醐味らしいものゝ臭ひを嗅がうとして居る。振り返つて見ると客觀的には坦々とし稀に惠まれたる二十年の道程ではあるが、主觀的にはやはり生命を磨り減す程の惱みがあつたのである。

世には惱みを知らぬげな人がある、一は大悟徹底の人、一は安價な慾望の外に人らしい希望も反省も努力も持たず漫然として動物的の生き方をする無智の人々である。

我々はまさか無智の世界を極樂世界とは觀じない筈であるが既に惱みを持つ我々である。一足飛びに大悟徹底を望む譯には行くまいではないか。

とかく煩悶は愚痴となり、愚痴はともすれば他愛もない諦觀に走つたり、自暴自棄に周圍を毒したりしたがる。家庭が檻だと云つて見た處で、夫一人、子供の二人三人位に苦しめられる程の意久地のない事で、果して家庭を飛び出してから社會を敎化し善導する程の抱負が如實に行へるかどうか。

諦めるのは何時でも諦められやう、飛び出すのは寧ろ止まるより容易かも知れぬ、婦人運動の第一線に立つて華々しく活躍し得る人は羨んでも餘りある事に違ひなからう。

けれ共、自分を虐げやうとする渦中で自分自身を和やかに落ちついた輝きを見せるのも滿更悪るい氣持ちのものではないと思ふ。卽ち先づ家庭内のどんな小さな事でも自分の惱みの種となる程のものは片つ端から全力的の誠意と工夫と努力とで自分の希ふ方向に向はしめるべきである。

自分が折角書き物をして居る時に夫が意地悪るく用事を命ずる。同情のないにも程がある。面倒臭いと云ふ態度に出る。子供がぐづる……こんな者を生みさへせねばと氣むづかしい顏をする。地獄は其處に生れ、檻は自らの手で作りつゝある結果になるではないか

水平運動と云ふのは現世界の一大思潮であり、婦人運動もつまりはそれなのであるが、この思潮をばまづ家庭内に取り込ませるべきである。夫は妻を敬愛し、妻は夫を敬愛し、親は子を、子は親を、兄姉は弟妹を、妹弟は兄姉を敬し愛すればそれでいゝではないか夫に關白の位があつたり親は子に對し生殺與奪の權があつたりしては堪らない、家庭内では『長幼の序』それ一つで澤山である。

一擧手一投足の勞で濟む事を、態々忙しい妻を煩はす夫に對しては、妻はまづ夫の不人情を悲しむまえに自分自身が夫に敬愛せられ感謝せらるべき價値を持つか否かを考へて見なければなるまい。どこ迄も夫に非があるとすれば、どこ迄も夫の理解を得るやうに精進しなければなるまい。

まゝならぬ浮世をば何とかしてまゝにして見たい、まゝにさせて下されと念じ且つ祈るべきである、がつかりしては駄目であり光明を思はないのは嘘である。

婦人問題に沒頭して其の向上と幸福との爲めに獻身的の努力を續けてくれる人達は勿論實に尊い。けれども婦人の總てがそれを望みそれに憬れるのは無理である。大多數の婦人は、この選ばれたる先導者の最もよき理解者であり聲援でありたいと希ふ事が肝要である。社會的に活躍し能はぬのを悲觀する前に、まづ自分の家庭内から差別的の空氣を徐々に拂ひ出し、郷黨に及ぼ

して見るがいゝ、否、それよりも一つ前に夫の尊さを知り子の尊さを知り同時に自分自身の尊さを知るがいい、夫と子との短所を補ふ親切を持つと同時に、夫と子とからよき感化と導きとを希ふ謙遜さを持つがいゝ。

かやうにして精進するだけでも我等は人格的に向上して行く筈である。

山を登るにしても、ケーブルカーや輿の力を藉りるのと、流汗淋漓草を分け巌を越えて頂上を極めるのとでは其快味の差、蓋し霄壤も啻ならぬものがあらふと思ふ。

無智の世界に住む人々を羨むならば我等婦人は精神的に滅びるであらふし愚痴の世界より踏み出し能はぬとすれば向上進歩は遂に望まれないであらう

もろ〳〵の苦惱煩悶の中に希望を捨てず、様々の工夫と努力と禱りとの結果到達する感謝の瞬間こそ我等地上に惠まれたる極樂世界ではあるまいかと思はれる。

職業婦人雑感

野方津留子

◇

東京日日に今三上於菟吉氏の『炎の空』と云ふ小説が連載されてゐます。

職業婦人であつた笙子は郊外のみすぼらしいアパートに兄と一緒に住んでゐた。其所に岡村と云ふ大實業家の誘惑が來て笙子は許婚の愛人を捨てゝ岡村に行く。貧しいジメ〳〵とした生活に耐えられなかつた笙子は、明るい華やかな世界へ世界へと突き進んで行つた岡村の別莊で近隣の佐藤子爵――岡村よりは更に上品で金のあるらしい而も本性は獣そのもののやう――たに移つて行つたのである。郊外のアパートの古びた疊、汚れたふすま、光の薄い灯木枯の吹く夜歸つても寒い火鉢一ツが笙子兄弟を迎へたこと。ピアノを習ひ乍らも其を買ふ所か、置く場所さへも無い貧しさ。金のないことから起る諸々の不幸、陰惨に耐えられなかつた。ブルジョアの組織に身を賣り込む外には、いゝ生活が來なかつた。東都一流のホテル住ひ、身のまわりのもの――

衣物も指輪も、欲しい時に百貨店から屆けてくれた。部屋付の女中。明るいシアンデリアの光り。數ケ月前には高い入場券で行けなかつた音樂會にも今度は安易に一等席に行ける身分。アパートの兄との生活は何とみすぼらしいうす汚い生活だつたらうと笙子は考へた。

然し笙子はブルジョアを愛してはならない。只愛されるだけで、愛するのは自分の負けだと考へた。威壓されたり、押しつぶされたりしてはならない岡村を會社の社長室に訪れた時、その社長振りに威壓を感じて『こんな筈ではなかつた』と氣を締め直した。

こうしてブルジョアを征服しブルジョアの生活に這入つて行つた。――彼女の身を賣り更に轉賣することによつて。その圓やかな豐かな肩と、眞白い襟足には、岡村も佐藤子爵も負けたのである。

◇

私はこの笙子を念頭に置きつゝ私共職業婦人の行くべき道を考へて見たいと思ひます。

◇

私共の御友達には、働いて居るのを『御小遣取り』と思つてゐる方がまだ多くはないでせうか。身のまわりの費用に給料の大部分を拂つてゐる方を知つてゐます。一回五十錢もする髮を月に數度結ふ方もあります。

然し近來でも私共の經濟生活が給料を『御小遣い』ならしめなくなつて來ました。一家の或は自分の生活費たらしめることが大變增して來て居ます。給料が生活を支へる勞働賃銀であるといふことを私共がハッキリ知つた時其所から、根强い主張や要求が、必然的に生れて來ることでせう。

私の妹は製絲工女をやつてゐます。あの人々は殆んど皆が、仕事を封建時代の『御奉公』の心持ちでやつてゐます。賃銀なども非常に安いのを、呉れるだけ貰ふて滿足してゐるかに見へます。

私共の仕事をするのは、御奉公でもなければ御小遣取りでもありません。

細心な御人好しで、柔順な、然も御奉公の氣持を多分に持つてゐる私共に課せられてゐる仕事と給料はどんなものでせう。私共には、重要な複雜な仕事は與へられて居りません（要求もしないが）少くとも男子の仕事の後仕末後掃除的のみと云へます。男子の多くは書記になるのに私共は雇人とか傭人とか云ふ一段下の資格――階級に置か

れます。

次に賃銀は世界の資本主義がみなさうですが、女性には、安い賃銀を拂つてゐます。それに我國の支拂方法は日給制です。一日病氣で休んでもそれだけ差引かれます。此は不合理です。私共職業婦人の力をだん〳〵増し、此を社會に認識させねばならぬと思ひます本誌の前々號で開地敏子氏が職業婦人の團體を作りたいと申されて居りましたが、私は心から賛成いたします。

◇

能力ある者には男子と同じ仕事と資格を與へよ。

日給制を月給制にせよ。

◇

次に私は職業婦人の服裝のことを考へたいと思ひます。私共の取る給料は二三十圓からせい〳〵七八十圓です。此れで婦人雜誌の口繪や新聞で季節毎に照介する流行通りにすることは到底出來ません。そうかと云つて女性の美しさをなくそうと云ふのではありません。女性の美しさの價値は如何なる社會制度のもとでも尊まれると思ひます私共は現在、金と閑とがありすぎる階級の〝美〟は到底得られない。否其れを意識的に捨て去らねばならない。そして新しい無産婦人の美を樹てねばならぬと思ひます。

上流家庭の婦人、赤坂新橋邊の藝妓ラシヤメン――此はブルジョアから見た時は略同一のもの――の眞似は、私共に出來やう筈がありません。其を出來るだけ安値に、手輕に眞似やうとする無産婦人があつたら其は無知です。その眞似がしきれないで、繕うても出る綻びを見た時私共は惨めな感がします。

目立たないで單調で、而も社會の重要な根本的な家庭勞働を負ふてゐる貧乏世帶の主婦の服裝を思ひ浮べて下さい。モシモシ孃、もしくは、デレガール、赤襟、チンチン孃、貯金ガール等の言葉の輕蔑した響き、赤襟の服裝を家から着て出ないで車庫で衣更へる方もあります。製絲工女はサナギの臭さが泌み込んでゐて俗謠にさへ唄はれてゐます。

私共の美がブルジョア的方法によらなければ出せないとしたら此等の服裝をきまり惡く、いやに思ひます。然し私共の行くべき道は別になければならない。

私共は忙がしい間に、私共の力で、充分に出し得る美を創り出すべき時代が來てゐると思ひます。

『一般に自分に或る特定の外觀を與へやうとする努力の中には常に當時の社會關係が反映してゐる』（プレハーノフ藏原譯藝術と社會生活二一頁）既に男子には無産者の服裝――簞笥の中に脊廣があるに拘らず菜葉服を着、カラー付ワイシャツを着る類――が、認められ出してゐます。私共も服裝によつて上流婦人藝妓ラシヤメン等の代表する美に對立したものを生み出さねばならぬと思ひます。

◇

私共のことを事務室の花と云ひ、娘子軍と云ふ言葉の中に、男性の女性を玩具視した見方が殘つてゐはすまいか

男子の同僚が私共を見る目差を御覽なさい。彼等の多くは、金と女の話の外に話題を持つてゐないのです。取りすまして職業婦人を眼中に置かない高貴な男子も居ります。職業婦人のほんとの立場を知り、理解してゐる人は少いと思ひます。私共のことを『釣堀の鯉』だと云つた者があります。鯉は釣られるか、釣られないでも身體に針の傷がついてゐると云ふのです。無産者の立場を知らない、みだらな釣人に對して、行くべき方向を知らずに、或る者は笙子の如く金魚たらんとする道を選ぶ婦人もあります。此の地位からの脱出に絶望して虚無的になる婦人もあります。私共は私共の力によつて新しい立場に立ち、途を切り拓いて行く外に道はないと思ひます。

（一、四、一三）

（五六頁よりつゞく）

激しいヴイオリンの音が、芝生を亘つて來た。

ジツプは苦き微笑を以て其音に耳欹だてた。金も亦！　併しそれはなんでもない。自分の爲たことから拔出ることは出來ぬ、とても出來ぬ。今夜彼はいつもの通りに接吻をするのであらう。そしてそれで何事も落着したといふ風に裝ふことになる。そんな有樣でいつ迄も繰返し又繰返す。だがそれは自分の過失だ。彼女は財布から六圓取出し、女中に返へす爲に机の上に置いた。そして突然考へた。『多分自分を倦きるやうになる、もし自分を倦きるやうになつたら？』

長編小說『かなた』より

寂しき結婚

ゴルスワーシー



ギタ、或は幼名をそのまゝジップと呼ばれる女は、生みの母を其産床に失ひ、戸籍面の父なる田舎紳士もやがて病死した。そして母と道ならぬ戀に此子の父となつた退職士官ウイントンの手に養はれて生成した。長じて父に似て馬や犬や野外の遊戯を好んだが、又父と大に異り、非常に音樂を熱愛してゐた。其二十二歳の時、父ウイントンは痛風保養のため　娘を連れてウイスバーデンに往つたが、こゝで瑞典のヴイオリニストなるグスターフ、フイオーゼンの奏演に魅せられ、遂に父の非常なる反對にも拘らず、此男の求婚を諾し寂しい結婚式を上げた。多感で優しくはあるが、強き誇りの心を抑へ得ぬ、上品に育てられたジップと、瑞典の賤しい大酒呑な父に持ち、天才肌ではあるが、粗野で、本能のまゝに行動する肉感的なフイオーゼンとの結婚生活はどんなであらう。ジップには魂がある、その魂に由つて眞の愛を得ることにフイオーゼンは失敗してゐる。ジップも夫を眞に愛し度いが、それは努めても出來ぬ。寂しい。フイオーゼンの昔からの友人に波蘭人ロゼーク伯と云ふのがある。ロンドンに遊蕩生活を送つてゐる音樂の愛好家である。其ロゼークを力に舞踊の初舞台に出やうとしてゐるウイングといふ若い美しい娘がゐる。

× ×

此自ジップは日を經るにつれて益々此高尚な遊蕩生活と接近するやうになつた。誠に珍奇な、復雜した社會で、音樂、詩、劇などの首の廻りに屹度群がるものは此遊蕩生活である此社會で彼女は頗る評判がよかつたが、併し心秘かに、自分は此社會のものでない、且又實を云へばフイオーゼンも此社

會の者でないと感じてゐた。フイオーゼンは純粹な意味に於て遊蕩生活の徒である、それにあまりに眞の藝術家である。されば彼は所謂伊達男を嘲笑り、又ロゼーク一派の者をも罵倒すること、恰度父のウイントンや、伯母のロザモンドや、又其人達の生息つてゐる世界を愚弄するのと變らなかつた。此フイオーゼンと一所に生活してゐて、ジップの受けた影響は、慥に一つあつた。それは自分はあの父のやうな古い因襲的な、教養のある社會の一部分でないことを愈々切に感ずるに到つたことである。之れは父から自分の生誕に就いての秘密を聞いて以來、彼女の明かに承知したところではあつたが近時益々それを悟るに至つた。古い社會に下ろしてゐた根はくさつて、新しい土に附着することは出來ぬ、而かも賴む夫とも精神上には決して結ばれてゐないといふ彼女の狀態は、次第に寂しさを増すのみであつた。

　眞實に幸福な時といつたら、時々訪ねてくれる父と一所にゐる時か、ピヤノに向つてゐる時か、さもなくば狗と遊ぶ數時間に過ぎなかつた。自分の今迄に爲し來つたことは、我れながら驚くべきことであつた、そしてなぜそれを爲すに至つたか、深い、充分な理由を見出さうと、いつも熱望してゐた。併し其理由を求め又願ふことの切なるにつれて、益々昏惑の度を増すばかり、籠のなかに居るといふ感じは愈々深くなつた。而かも近頃又別の、そして一層判然せる不安の念が彼女を襲ふた。

　彼女は多くの時を庭園で過ごした。庭園では花は悉く咲き盡し、ライラックも終つた、アカシヤは漸く蕾を持つたばかり、鶫は默つてゐた。

　ウイントンはその注意深い經驗に由つて、三時半から六時迄の間に來れば、大抵厭やな女婿に逢ふ機會がないことを知つて殆ど毎日のやうにお茶に來て、芝生で心靜かにシガーを燻らせるのであつた。ある午後いつものやうにジップと共に坐つてゐると、乳母のベチーがやつて來て、一枚の名刺を差出した。その上には『ミス・ダフネ・ウイング』と印刷してあつた。

『お通し申しな、それからベチーや、新しいお茶とバタ付きの燒パン、燒パンを澤山ね。そうです、それからチヨコレートに、外にあり合せのお菓子、ね乳母や！』

『乳母や！』と呼ばれる時にいつも起る一種の表情をして、ベチーは芝生を向ふに行つて仕舞つた。ジップは父に向ひ

『いつかお話した若い踊娘よ。ほんとに立派な姿！　けれど着飾つてゐるから、寧ろ氣の毒だわ』

その通り着飾つてゐた。そして相客のあるのを見て、明かに心騷ぎしてゐるらしかつた。暖い象牙色の着物を纏ひ、木の葉色の薄紗で顔を掩ひ、極小さい造りもの丶木葉のついてゐる飾帶をふわりとかけ、キチンと緊めた頭には又別の綠色の葉を卷付け、何だか綠樹で掩ふた四阿から顔を出してゐる水の精のやうであつた。少し無理に人の注意を惹つけやうとする恨がないでもないが、兎に角奇麗なこしらへで、就中、彼女の姿の美しさは、どんな上衣も匿すことが出來なかつた

彼等は明かにもじ／＼してゐた。

『オー奥樣、私、お伺ひしてもよろしいかと思ひまして——ほんとにも一度お目にかゝりたかつたものですから。ロゼーク伯も往つてもよからうと謂はれるし、私の出かけることに皆きまつちやつたのです。オー御免なさいまし』

　と、ウイントンに向つて、眼と唇とを開けて挨拶してから、彼れの差出した椅子に坐つた。ジップは父の表情を見て、吹出したくてたまらなかつた。父とミス・ダフネ・ウイング！そして少女は明かに善い印象を與へやうと苦心してゐるやうであつた。その内ジップは訊ねた。

『あなたはあれから又ローゼク伯の所でお踊りなすつて？』

『オー。踊りました、奥樣はそれで—あの—私は又—』

　と云ひさして止めた。『扨はグスターフは自分に告はないで、此女に逢つてゐたのだな』と思つたがすぐ詞を續けて、

『あゝ、さう／＼、さうでした。すつかり忘れてゐました。初舞臺は何日？』

『來週の金曜日、ね御覧！　オクタゴン座よ、偉いでせう？契約もほんとに善いの。あなたもフイオーゼンさんも是非來て戴きたいのですが』

ジップは嫣然しながら囁くやうに、

『勿論二人とも參りませう。父も舞踊が好きです、さうでせう？　お父樣！』

ウイントンは口から葉卷煙草を取出し、溫雅に云つた。

『善ければです』

『オー私のは善いのです、さうでせう？　奥樣。いゝえ私は努めましたと云ふのです——十三の歳から。わたしは只もう好きなのです。奥樣、あなたは屹度御綺麗な踊をなさると思ひますわ。あんなに申分ないお姿ですもの。わたしは奥樣のお

歩行きなさるのを見るのが大好き！』
ジップは赤い顔して謂つた。
『ミス・ウイング、さ一つ召上れ。內側に丸ごとの蝦夷いちごが選入つてゐます』
小さな舞踊家は其一つを口に入れた。
『オー、ですが何卒ミス・ウイングと云はないで下さいな。只ダフネと。フイオー――みんなさうお仰るのです』
父の顏が氣になつてジップは小聲に、
『ほんとに可愛いらしいお名！　も一ついかゞです。之は杏』
『難有う、ほんとに結構で御座います。ね、私の初めて着て出る着物はみんな橘色の白なの、フイオーゼンさんがお勸め下すつたのです。けれ共御主人はあなたに御相談なすつたでせうから、實はあなたのお勸め下すつたのです、さうで御座いませう？』
ジップは默つて首を振つた。
『ロゼーク伯はいはれますの、世界中が私を待つてゐるつて――』
と云ひさして、唇を半ば開いたまゝ止めた。それから疑はしさうにつけ足した。
『それは眞實でせうかしら？』
ジップはもの軟かに答へた。
『眞實であるやうに望みます』
『私は兎に角新しいと伯は云はれます。まあそう思つた丈でも嬉しいわ。伯は非常に趣味の高い方です。フイオーゼンさんもさうです。さうでせう？』
父の葉卷の煙の背後にその唇が堅くひき緊つてゐるのを意識して、急に立つてあちらへ往つてしまいたいやうな氣がしてジップは只默頭いた。舞踏家は口にお菓子を入れて、いとゞ平氣に、
『無論さうですとも、あなたと結婚なさる位だもの』
それからウイントンの眼がジッと自分の上に注がれてゐるのに氣がついて、彼女は周章てゝ、大急ぎに菓子を呑込み、そして云つた。
『オー、ほんとに此處は氣持のいゝこと、まるで田舍のやうさあお暇をせねばなりません。練習の時間になりました。今は一寸でも油斷してゐられませんの、そうでせう？』
と彼女は立上つた。

ウイントンも又立上つた。ジップは娘の眼が父の硬い手の上に落ちて、圓く、次第に圓くなるのを見た。そして家の横側を父に送られて歩きながら、女の氣を配つた聲として。

『オー、どうか是非――』

といふのが聞えたが、何が是非か、其後は聞えなかつた。

　椅子に深く身を落してジップは身動きもせず坐つてゐた。蜂は花の間に囁いてゐるし、鳩は樹の間に囁いてゐる。日光は彼女の膝と、長襪の飾の間から伸した足とを暖め、臺所では女中の笑聲、狗の戯れる氣持よい唸聲が、遠方の道路に聞こえる牛乳屋の大聲と共に、庭に傳はつてくる。

萬事悉く平和の裡に包まれてゐたが、獨り彼女の胸の裡には不思議な、欺かれたやうな氣持、異樣なこんがらがつた感じがしてゐた。二三週間前に心ひそかに恐れ惱んでゐたことが愈々實際來たなと、悟つたそのあとからすぐ續いて、自分の夫が自分に打明ける程度も、こんなものかと判つたのである彼女はウイントンに云つた通り、子供が欲しいと思つてゐない。自分の生れる爲に、親が死ぬるとか、非常な苦痛が伴つたとかいふことを意識してゐる人は、時々こんな反感的直覺を抱くものである。しかも夫フイオーゼンが欲しがつてゐるからといふ慰藉も彼女にはなかつた。彼が子を欲してゐない事はよく解つてゐる。そして今やそれが程なく此世に來らんとすることが明白となつた。それ許りではない、精神的の結合、それあるばかりに結婚は神聖のものとなり、母となりての犠牲も一つの悦樂となるその精神的結合には決して達してゐない、又達することは到底出來ぬと知つてゐる。明かに自分は馬鹿な、そして早計な過失の網にかゝつたのである。結婚して僅か數ケ月それにもう結婚は失敗であつた、將來にも希望のないことは疑を容れぬ。此新しい確實といふ光で照して見ると、もう心をのゝくの外ない、幻滅は婦人の胸には歡迎せられぬ、特にそれが他人に對してばかりでなく、自分自身に對する幻滅であるとき、益々嫌である。

　自分の偉い獻身、自分の人生の計畫！　それは全體何であつたのだ？　フイオーゼンを救濟しやうと！

莫迦な、一笑の外ない。却て自分を失つてしまつた。今でもゝう牢舍にゐる感がある、子供が生れゝば益々束縛せられるであらう、ある種の女に取つて、之れはせねばならぬことだと思ふと、それが却つて神經を緩和する事がある。併しジップは其正反對、彼女を強いることは、やがて悉く反對の情

緒を押込めてしまふ。彼女は自分で忍從するかもしれぬ、併し——人はその本性を變へることは出來ぬ。

　そして斯んな風で、野鳩がク、と鳴き、日光が彼女の足を暖めてゐる間に、彼女は曾てない苦い數分間を送つた。そのうち例の自尊の心が手傳ひに出てきた。悲慘にも目茶苦茶なことを爲てしまつたのであるが、併しそれを誰にも知らせてはならぬ——殊に父に知られてはならぬ、あんなに必死に警戒してくれたのだもの。彼女は自分で床を作つたのだ、自分でその上に横はらねばならぬ。

　ウイントンが歸つて來た時、彼女は嫣然してゐた、で彼は云つた。

『ジップ、別に人を魅するといふところはないではないか』

『けれどあの顏はほんとうに立派でせう？　そうお考へなさらなくつて？』

『十人並』

『さうです、けれど舞踊が初まると、その平凡なところが落ちて仕舞いますのよ』

ウイントンは半ば閉ぢたる眼瞼の下から彼女を見た。

『着物を着てか？　フイオーゼンはあの女のことをどう思つてゐる？』

ジップはニコリとした。

『あの女のことを思ふつて？　知りませんわ』

彼れの顏が注視するので見る〳〵引緊つてくるのが、彼女に感ぜられた。それから彼は突然謂つた。

『タブネ・ウイング！　莫迦な！』

此詞は嫌惡と不信任との傑作であつた。自分の娘が危いと！ああんなものゝ爲に！

×　×

　父が去つた後、ジップは坐つたまゝ、太陽が全く沒してしまひ、夜露が薄い上衣を通して、そつと泌入る迄、じつとしてゐた。彼女は自分以外の誰か、又何かのことを考へたかつた。人を幸福にすることが、自分の幸福になる方法であると尠くとも世間の人はさう謂つてゐる。自分もやつて見たいやつて見ねばならぬ。ベチー——あんなに頑丈で、脚にあのリユーマチがあつて、一體彼女は自分のことを考へるだらうか？　或は伯母のロザモンド——野良犬と、跛足の馬と、貧乏な音樂家とを絶間なしに救濟してゐるあの伯母は？　それから父あの一から十迄實際家のやり口であるにも拘らず、

いつも舊の聯隊にゐた兵士の爲に、何かしら盡してやつてゐる、そして又常に自分の事を考へて下さる、自分の快樂の爲には何でも爲て下さるではないか。誰をも愛しやう、そして彼等に幸福のくるやうにしやう！　出來ないだらうか？　只人間といふ者は愛するのに中々六ケしいものである。小鳥や畜類や、花卉は是れを愛するのが誠に自然で、又容易なやうに思はれるが、人間は大分勝手が違ふ。

彼女は部屋に上つて、晩餐にと着物を着かへ初めた。夫はどちらの上衣を好むであらう？　青白い、衿の低い琥珀色のか、それとも珈琲色のレースのある白い、歎いのか？　彼女は遂に後者にきめた。鏡に對して柔やかな、すらりとした姿をつく〲と視て居るうちに、身震ひが體内にした。あの姿も今に皆去つてしまはう。市街で恥かしくもなく、見苦しい姿を曝らしてゐる婦人達と、自分も同じやうになるのだ。生命を世間に持出すために、見る眼にいとはしき醜き姿とならねばならぬとは、決して公平とはいへぬ。ある婦人はそんなのを却て誇とするやうであるが、どうしてそんな氣になれるのだらう？　自分はあんなに成つたら、二度と世間に姿を現はすまい。

彼女は衣代を終へて階下にをりた。もう殆ど八時なのに、フイオーゼンはまだ歸つて來てゐない。晩餐の相圖の支那鉢が鳴つた時、彼女は歎息をついて窓から離れ、そして食卓に就いた。その歎息が氣晴しとなつて、二匹の狗を側に置き、食事を濟ました、それからピヤノの前に坐つて、ショパンを試作や、ワルツや、マツルカや、序曲や、ポロネーズ舞踏曲までみんな彈奏した。そして此作曲家に對して弱點を有してゐる乳母のペチーは、勝手口をしきる戸を半ば開けて、そこに椅子に坐つてゐた。乳母は一寸行つて覗いて見たかつた、奇麗な若奥様が、白い禮服を着て、兩側から蠟燭に照らされその傍には鉢の內に美い香のする百合が咲き亂れてゐるのではないか。そして一人の女中があまり近くやつてくるので、腹立たしさうに叱ッ叱ッとばかりに逐ひやつた。

夜が更けた。寢前の飲料物の盃もくるし、女中は皆床に就いてしまつた。ジップが彈奏をやめてから餘程の時が經つので、彼女は燈火を消し、二階に上らうとして、フランス窓の所に立ち、闇の外面をぢつと睜めた。なんて暖いのだらう、塀際の素馨の香りをも誘出しさう！　星一つ見えぬ、いつもロンドンには星が殆どないやうに思はれる。不圖物音がする

ので、ぐるりと振向いた。戸際の闇の裡に背高い影が見える深い歎息も聞えるので、驚いて叫んだ。

『誰？ グスターフ？』

彼は何か謂つたが、彼女は其意味を解しなかつた。手早く窓を閉めて彼れの方に行つた。廊下の燈火に照された彼れの顔の半面は蒼白で、眼は異様に輝き、袖は悉く白くなつてゐた彼はもぐ／＼謂つた。

『幽靈！ 小さな幽靈！』

それから瑞典語らしい言葉を二言三言謂つた。ジップに取つては泥醉とかく肉薄するのは初めてゞあつた。そして『若し何人か看たらどうしやう、まあどうしやう！』と思ふ許りであつた。大急ぎで廊下に出で、裏の方の戸を閉めやうとしたが、彼は彼女の上衣を捉へ、頸のレースは裂いて、その絡まる指は、彼女の一方の肩を掴んだ。彼女は音を立てやしないか、彼れをのめらせはしないかと心配して、死んだやうに停まつた、そのうち彼れの他方の手は、彼女の他方の肩に掴まり、彼女を支柱として彼は辛く立つてゐた。何故彼女は電氣に打たれたやうに驚き、悲愁と、恥辱と、憤怒とで大地に叩きつけられてしまはないのであらう。彼女は只考へた『どうしたらよからう？ 何人にも知らせないで、どうしたら二階へ連れて行けるだらう？』と。

そして振向て彼れの顔を見た、眼は輝き、色は眞青で、泣きたくなる程哀れつぽいやうに見えた。そこで物やはらかに謂つた。

『グスターフ、それでよろしい、私に寄りかゝりなさい、さ二階へ行きませう』

何の力も、何の目的もない樣に見える彼れの手は、機械的に彼女の頬に觸れた。嘔吐づくやうな嫌さを感ずる以上に、怖ろしく氣の毒やうな氣がして、彼女は腕を腰のまわりに置き、彼と共に階段の方へ歩んだ。若し何人も聞かなかつたら、もし自分獨りで靜に二階へ連行くことが出來れば！ と只それ許りを氣にして彼女は囁いた。

『何も話さないで、氣分がよくないのですから、さ、緊り私に寄りかゝりなさい』

彼は非常な努力をするらしく、其唇は膨れいで、悲慘でなければ滑稽なといはれる高慢ちきな表情をして、何事かぶつぶつ呟いてゐた。

死物狂ひに愛してゐる者でも支へてゐるかのやうに、彼女

は力のあり丈を盡して彼を支へながら、階段を上り初めた。
併し思つたよりも容易かつた。もう一ト息で寢室、それで危險は過去つてしまふ。濟んだ！彼は床の上に横はり、戸は閉められた。それから暫くの間、身震ひの發作が激烈に起つて、齒ががた〳〵と留めどなく鳴つた。大きな姿見に自分の姿が映つてゐる。美しい頸飾はみんな裂け、綻び彼れの手の摑んだ肩のあたりは赤くなつてゐる。彼女は衣裳をかなぐり棄て、搔卷を羽織つて彼れの所へ行つた。彼は殆ど昏睡の狀態にあるのを、辛く坐らせて寢臺の手摺によりかゝらせ、ネクタイとカラを脫づして、扨何を飮ませたら好いかと、大に頭を惱ました。サル・ヴオラチル！　あれこそ善いに相違ない。その藥で彼は漸く我れに歸り、衣服を脫いで床に這入つた。彼女は彼を靜めて立てゐた。泣きはしない、泣きはしない。一つ長い噦泣が突かゝつて來たが、只それ丈け。初めわざと堅く眼を閉ぢてゐたやうであつた彼は、今や高鼾をかいて眠つてゐる。燈火を消して暗黒の裡に、大きく眼を明けて闇を凝視してゐると、彼女の唇に微笑が湧いて來た、非常に不思議な微笑が。彼女は書物で讀んだ若い人妻のことを考へつゞけてゐたのであつた。

翌朝、尚深く熟睡してゐるフイオーゼンを視て、彼女のまづ胸に浮んだのは『恰度同じだ』といふことであつた。そして又突然思つた、よくも昨晩つく〴〵嫌だと思はなかつたものだ、今も尙さほど胸惡く思はぬとは、我れながら變だと。事は強き嫌惡の情を起こすには一體あまりに深い、又ある意味から云つて、あまりに當然なのである。彼女は彼れのこの不拘束なのを見て、さほど悲み憤る考を起こさなかつた。それに彼女は既に久しく彼の之れを嗜むことゝ知つてゐた。ブランデーを飮んで、長くそれを匿くしをゝせるものではない。
彼女は靜に床を拔出で、椅子の上に揉くちやにしてある彼れの靴と衣服とをかき集め、それを衣裳室に持ち運んだ。そして朝の日光に照してブラツシをかけ、又音を立てないやうに、糸と針とレースとを以て、寢室に歸つた。誰にも知らせてはならぬ。夫にでも知られてはならぬ。今迄彼女は一つ外の、恐ろしく大切なあの事を、すつかり忘れてゐたが、今それが非常に突然に、又非常に痛ましく還つて來た。自分がそれを秘密にして置き得る限り、それを誰れにも知らせてはならぬ、殊に彼に知らせてはならぬ。

朝はいつものやうに過ぎたが、正午に成つて音樂室に行つて見ると、彼はいつの間にか外出してゐた。恰度晝飯の席に着かうとしてゐると、ベチーが例の大きな微笑を湛へて這入つて來た。

『ロゼーク伯がお來でゞ御座います』

ジップは驚いて立上つた。

『フイオーゼンさんは留守だとお云ひ、ベチー、併し――併しなんなら上つて晝飯を召上がらんかとお訊き、それからね白葡萄酒を持つて來さして下さい』

此來客が姿を現はす迄のほんの二三秒間、ジップは譬はゞ牡牛が草を喰つてゐる野に這入つて行くといつたやうな一種の興奮を感じた。

假しロゼークをいかに酷評する者でも、彼に機轉が缺けてゐるとは云へない。彼はグスターフに逢はんが爲めに來たのである、併し彼女が晝飯を差上げるといふのは、なか〳〵親切だ、大に愉快と思ふところである。

彼は彼女の厭ふが爲に例のコーセットを脱し、殊には嫌やな風釆をやめたといはん許りに、いつもよりも素直に、もつと眞摯に見えた。青ぶくれた顏の色も少しく日にやけ、談話のうちにも例の皮肉な裏のある言ひ方がなく、彼女の『美しき小さき家』を賞め、藝術や音樂の事を語る言葉のうちにもいくらか曖昧が見えた。

ジップはどうせ嫌ひではあるが、此時程左程でなく思つた事はなかつた。併し彼女の直覺は油斷なく警戒してゐた。晝飯の後に、二人は庭を越えて音樂室に行き、彼はピヤノに坐した。彼の彈奏け鋼鐵の指を音響に對する眞の熱情によりて動かすといふやうな、深い、愛撫する趣があつた。ジップは長椅子に坐し、耳を傾けながら、彼れには視られないで、ひそかに驚嘆しながら彼を見てゐた。

彼はシューマンの『小兒曲』を奏してゐた。こんな鮮やかな野趣横溢する響を造るものが、どうして道ならぬ考を抱くことが出來るのだらう？ そしてそのうち彼女は口を開いた。

『ロゼーク伯』

『何ですか？』

『何故あなたは昨日ダフネ・ウイングを茲へお送りなさつたのです？』

『私が送つた？』

『えい』

併し此瞬間に彼女は問はねばよかつたと思つた。彼は腰掛をぐるりと廻して、ぢつと彼女を觀た。その顏は變つてゐた。

『あなたがお尋ねになる以上は申しますが、グスターフはあの女と屢々逢つてゐることは、御承知あるべきだと思ひます』

彼女が恰度豫想した通りの返事を彼はした。

『わたしがそれを氣にすると御考へですか？』

彼れの顏がちらと搖めいた。彼は起立つて靜に云つた。

『お氣にかけられないで結構です』

『なぜ結構？』

彼女も亦起立つた。彼は恰ど彼女の背丈位いしかないが、それでも彼れの瀟洒たる衣服の下は、いかに厚く鋼鐵のやうであるか。いかに彼れの顏は蛇のやうな一種の意志の力があるかを突然彼女は意識した。その胸は急速に打ち初めた。

彼は近づいて云つた。

『結構です、グスターフの事は終結が付いた、濟んでしまつた事が解れば――』

彼は突然口を噤いだ、これはしまつた。間違つたといふことは明だが、どこが間違つてゐるのか分らぬのであつた。ジップは單に微笑した。彼れの頰はサッと赤らんで、

『彼は直に消える噴火山です。私はよく彼を解してゐます。あなたも亦彼を解しなさるがよろしい。何故お笑ひなさるのです？』

『彼を解するのがなぜいゝのです？』

彼はひどく蒼白になつた。そして齒を嚙しめて云つた。

『あなたが時を空費しない爲にです。あなたを待つてゐる戀があります』

併しジップは尙微笑してゐた。

『昨晩彼れをあんなに醉拂はしたのは、その戀からですか？』

彼れの脣は振へた。

『ジップ！』

ジップは身を轉じた。併し單に方向を換へたばかりで、彼は彼女と戶口との間に立つた。

『あなたは決して彼を愛しません、それが私の口實です。あなたは今日迄あまり多くのものを彼れに與へました。彼れの相當する以上に與へました。吁！ 私はあなたの爲に煩悶してゐます、苦惱してゐます。私は魅せられたのです』

其燻ぶる眼の外は、彼は底の底まで眞白になつた。彼女は

怖れた。怖れたが故に、彼女は負けずに踏留まつた。若し彼が――彼女はどうすることが出來やう？　呼鈴はある、それへ飛んで行かうか？　僕婢共に疑ぐられるのが恐ろしい。横戸を開けて逃げやうか？　そのうち突然彼は再び自制の力を得たやうであつたが、彼れの心持はよくわかつてゐた。彼は單に鋭く見詰めて――女が驚いてゐるのが判つてゐるので――一種の催眠術に由て、彼女の防禦線を突破しやうとしてゐるのだ。

此眼の血闘に疲れて、彼女は自分ながら次第に敗けかゝつた、眩い初めたと感じた。實際彼が足を動かしたかどうか判らぬが、彼は一寸又一寸と近づいて來るやうに思はれた。彼女は身の毛のよ立つやうな感じがした――彼れの兩腕がもう自分のまわりにあるやうに。

彼女は辛く彼れの眼から自分の眼をもぎ去つた、そして不圖彼れの波立つ髪が眼についた。屹度、間違ひなく、それは鐵鉗で縮らせたのだ。面白いと思ふ心が胸に起ると共に、殆ど聞えぬ樣な聲が脣を洩れた『女を手に入れる驚くべき技倆―？　彼れの眼は動搖した、息は少しく喘いで、その脣は分れ垂れた。』

ジップは部屋を橫ぎつて呼鈴を鳴らした。恐怖は悉く過去つてしまつたのである。彼は一ト言も云はず、グルリと背を向けて庭に降りた。彼女は芝生を踏みゆく其後姿を見守つた行つてしまつた―　亂暴極まる激情を嘲笑――殆ど無意識な嘲笑――で彼れを打碎いたのであつた。それから急に身の疲れを覺え、手ひどく呼鈴を引張つた。黒い衣服眞白な前掛けをつけた女中の姿の家を出づるのを見た時、すつかり恢復してしまつた。自分がほんとうに嚇やかされ、怖らされ、殆どあの男に敗を取らうとしたと、而かも自分の家で、女中も手近かにゐるのに、そんなことがあり得やうか？　女中を顧みて彼女は靜に云つた。

『狗を連れて來てお吳れ』

『ハイ、奧樣』

庭は六月中旬といふ初夏の暖さを受けていとゞ靜に、空氣は蜂の羽音と、草花の香氣とで懶げであつた。

そしてジップは日影に坐つて、狗の轉げまわり、騷ぎまわるのを看やうともせず、どこにか慰藉と安全の自分の小さな世界がありはせぬかと、あれか、これかと思ひ迷うたが、併しどこにもそれを求むることが出來なかつた。自分の周圍は

只熱苦しい、重い濃霧が一杯に覆うてゐる、そのうちには色々なものが匿れてゐて、自分は只負けず嫌ひの誇と、そして苦悶と恐怖とを立して訴へまいと思ふ意思とに出て、辛く立つてゐるやうなものであると思つた。

フイオーゼンは其朝家を出てから、只すた／＼と歩き續け遂に辻自働車を見付けて、之れに飛乗つた。帽子を投出し、後ろに凭れて、どこでもいゝからと、只無鐵砲に速く走らせた。これは彼が心に不安を感ずる時にする一つので癖、重くもない財布を持てゐるものには、金のかゝる厄介な悪癖といはねばならぬ。迅速な運動と、他の車と危く擦れ違ふ面白さとが、彼に取つては鎮静劑なのである。彼は今朝此鎮静劑を要した。どこをどう這入つたか少しも記憶してゐないで、醒めて自分の寢床にゐることが判るなどは、二十八歳の青年に取つては、誰にしても珍らしい事ではない、併し彼が結婚してからは、今朝が最初でゞあつた。それもまるきり記憶してゐないのなら、不安の度も少しい薄いであらうが、自分が暗い應接間に立つて、極手近かに幽靈のやうなジツプを見、又偶つたこと丈は想起こせる。そこで何となく怖ろしいやうな氣持がする。大抵の人がさうだが、怖ろしいと思つた時はその一番悪い時なのである。

若しジツプが、從來彼れの同類であつて、共に情慾の果物を食つたあらゆる他の婦人のやうであつたなら、彼は斯な困つた屈辱を感じはしない。彼女が若し彼等と同一であつたら彼は最早、あのロゼークが云ふやうに、『終末がついて』仕舞つてゐるであらう。併しまだ結末がついてゐないことは、彼自身も充分承知してゐる。彼は醉拂ふかも知れぬ、あらゆる不拘束を盡くすかも知れぬ、人しジツプは尚彼の肉感の裡に引掛つてゐる。そして只彼女に近くことが出來ぬ爲めにのみ彼れの精神の裡にも引掛つてゐる。

ジツプが非常に受身であることが、卽ちその力で、又その引力の秘訣である。彼れが彼女のうちに感ずるものは、かの神秘な自然界の心の如きもので、人間の激情には柔順に隨いてゐて、而かも一種の微　な微笑を含んで、犯し難いやうに離れ遠ざかつてゐる。夜も晝も野にも森にも、此捕捉し難い微笑は常にあつて、人をして憬慕の思ひに心を痛めしむるのである。彼女のうちには、花に樹に、流れに岩に、小鳥の歌に、日の光星の光の下なる無窮永遠の微吟のうちに見る如き

測る可らざる、柔き、振へをのゝく無頓着が感ぜられる。彼女の黒く、半ば笑める眼は彼れを誘ひ、彼れに消す可らざる渇仰の心を鼓吹するのである。そして彼れの性質は、精神上の困難に出會うとすぐ拗ねて後返りする、他に慰安物を求める、傷けられたる我儘を極端といふことを以て繃帶せんとする。自暴自棄と、それに伴ふ悲哀と、嫌惡すべきものと愛好すべきものと、兩方を兼ね持てゐる甘へ兒といふのが彼れである。及びもつかぬジツプといふ此お月樣を欲しがり、愈々それを得ると、扨彼女をどうしていゝか解らぬ、いつもひどく噛付くやうな態度でゐて、そして次第々々に遠かり行くのを感ずるのである。時には精神的に彼女に接近できぬを憤り復讐を望んであらゆる種類の放縱を盡くさうとも考へる。只彼を檢束して之れをなさしめぬのは、彼れの業務があるからである。彼は實際其技に苦心してゐた。勿論そこに尙缺けてゐるものがあつた。彼はあらゆる善き資格を有してはゐたが其資格を結合すべき道德上の後楯を缺いでゐた。是れさへあれば、彼れを其相當する名聲の地位 置くことが出來るのにと思つてゐた。自分と同年輩の者が、自分よりも高き地位にゐるのを見て、彼は再三驚き又氣を惡くしたのである。

自働車を驅つて町中を縫ひめぐりながら彼は默想した。

『自分は昨晚 實際彼女を驚かしたやうな事をしたであらうか？ 何故今朝彼女に逢つて結果を看なかつたのだらう？』と、彼れの唇は斜めに拗れた。よくない結果を看るのは、あまり得手てゐないのである。此際誰か身替りを探がさうと、いつものやうに默想した結果、ロゼークを思ひついた。婦人に惑溺してゐる大抵の利己主義者がさうであるが、フイオーゼンもその如く多くの友人を持てゐなかつた その內でロゼークは最も變らぬ友である。併し彼に對してもフイオーゼンは一方に輕蔑、他方に恐怖を抱いてゐた、締りのない、けれど廣い眼界を持つてゐるものは、得て彼よりも才能がなく、而かもより强い意力を持つてゐるものに對し、蔑しみもするが、又怖れもするものである。その上彼に對しては、我儘兒が乳母に對すると云つたやうな感じもあつた。それに必要の考へもある、藝術を生活とせねばならぬものは、彼れのやうな鑑賞家で、又重い財布を持つてゐる保護者を必要とするのである。

『畜生！ 彼奴のブランデーは善くない結果を生ずる位、彼奴は知つてゐてもいゝのだ、又實際知つてゐるのだ。己が段

々馬鹿に成つてゐるのを彼は見てゐたのだ。彼奴何か魂膽があつたのだ。あれから己は何所へ往つたか？　どうして宅へ歸つたかしらん？　實際俺はジップの感情を害したのかしらん？」

若し婢僕共が視てゐたら、それこそ最も惡く、彼女の心を怖ろしく昏倒してしまつたであらう、と斯う冥想を續けて獨りで笑つた。それから又今迄なかつた新しい恐怖が起つた。自分は彼女を知らぬ、彼女が何を考へ、何を感じてゐるか少しも知らぬ、彼女のことは何一つ知らぬ。どうも不都合だ。自分は何も匿さぬ、自然の如く自由開放で、何事でも彼女に示してゐる。自分は昨夜何をしたらう？　あの下婢め、今朝變な眼付で自分を視てゐた、と考へは矢張り同じ所に戻つて來る。そして突然運轉手に、

『ベリー街へ行つて呉れ』

と命じた。ベリー街へ行けば、兎に角ジップが父を訪ねたかどうかゞ判る。併しウイントンのことを考へると、いつも乍ら苦しい壓迫を感ずる。幾度か往くまいかと思つたが、快速力の自働車は、彼が命令を變へる間もなく、その小さな街路に着いた。戸口に立つて待つてゐる間に、彼れの額には輕い汗が滲み出た。

『フイオーゼン夫人は來て居られますか？』

『お見えで御座いません』

『今朝方來られませんでしたか？』

『イーエ』

　此突飛な質問に何か説明すべきだとも思つたが、無頓着げに何も云はず、肩を縮めて引下り、再び自動車に乘つて、今度はカーゾン街へ走らせた。若しジップが伯母のロザモンドの所へも往かなかつたら、それでいゝ、何處にも他に往く所はない。ところでそこへも往つてゐなかつた。漸く安堵の太息を吐くと共に、急に空腹を感じ初めた、まだ朝飯を食べてゐなかつたのだ。ロゼークの所へ往き、金を借りて自働車に拂ひ、晝飯も喫べやう。併しロゼークは留守だつた、もう宅へ歸るの外ない。運轉手は賃錢の支拂ひを疑つてゐるやうに變な眼付をしてゐるやうだ。

　漸く家へ歸つて四ツ目垣の下を這入つて行くと、長い狀袋を持つてゐる男がすれ違ひに出て來て、妙な眼付で彼を見た

　ジップは自分の机に向つて、家計簿に引合せて勘定書を調べてゐるやうであつた。彼女は振向かなかつた。そしてフイ

オーゼンは立留つた。どういふ風に自分に接するだらう？
「晝飯が喫べられるか？」
彼は云つた。彼女は立つて呼鈴を壓した。彼は自分ながら憫笑な氣持がして、すぐに彼女を抱き、『ジップ！ 惡かつた、許してお呉れ』と謂はうとしてゐた。
呼鈴に應じてベチーが出て來た。
『あの、旦那樣に晝飯を持つて來て下さい』
肥つた乳母が出しなに、嫌な鼻あしらひをしてゐたのを彼は氣付いた。乳母も亦彼れの絶交してゐる一部分なのだ。そして突然聲を荒げて彼は謂つた。
『一體どんな者が亭主に欲しいのだい？ 晝飯に歸へれなかつたら死んでしまうやうな田舍紳士かい』
ジップは振向いて家計簿を差出した。
『わたしは食事などは少しも構ひません、併し之れはどうでも構はぬといふわけに往きません』
彼は讀んだ『トラビス・サムボーン洋服商店「五百四十一圓七十錢』
『まだこんなのが他にも澤山あつて？』
フイオーゼンの顔は深く自尊心の傷けられた時に見る特別な蒼白な色になつた。
『ウン、それが何だ。勘定？ お前それを拂つたのか？ 私の勘定を拂ふのはお前の仕事ではない』
彼女の脣は振へた。
『今度拂つて貰はねば訴へるといふのです。金を借りとくなどは怖ろしい事と思ひます。顔にかゝわります。まだ他にもありますの？ どうぞお仰つて下さい』
『云はない。それがお前の構つたことかい？』
『大に構ひます。私は此家を持つて、女中の支拂や、色々なものゝ支拂をせねばなりません。私がどんな事情にあるか知りたいのです。私は借金はせぬつもりです、ほんとに嫌です』
彼女の顔は彼の解し得ぬ峻嚴な有樣があつた。彼は朧氣に認めた、彼女は昨日の今、自分が正氣で彼女を見、彼女と話した最後の時のジップと違つてゐる。そして此新しい反抗の態度が樣々な有樣で彼を動かし彼れの、自惚心を傷け、不思議な恐怖心を起こさせ、而かも彼れの肉感を唆るのであつた
彼は近づいて、もの軟かに謂つた。
『金！ 金などは呪つて仕舞へ。もういゝ、仲直りしやうで

はないか』

全く好かぬといふうちにも、ある魂消た表情をして彼女は云つた。

『金を呪ふなどは子供じみてゐます。私は私の持つてゐる丈は費ひます。私はそれ以上は費ひません。父に賴み度くありません』

彼はどかりと椅子に腰を下ろした。

『ホー、ホー、道德！』

『いえ、誇りです』

彼は陰欝げに謂つた。

『それであなたは私を信じない！　私は自分の入用だけは、儲ける、あなたの持つてゐるより以上に、いつまでも、それを信ぜぬ。今迄いつでも私を信用してゐない』

『私はあなたが今、儲けられる丈儲けてゐられると思ひます』

『それはあなたがさう思ふのだ。私は金は入用ぬ、あなたの金はいらぬ！　私は無一文でも生活ができる、いつでも、實際したことがある、何度も』

『シーツ』

彼は振向くと戸口に女中が立つてゐた。

『あの旦那様、運轉手が申してゐます、賃銀を今戴けますかそれともまだ御用が御座いますかと、六圓』

フイオーゼンはぢろりと女中を見詰めた、彼のよくやるやつで、女中のよく云ひ〳〵してゐたやうに、なんて馬鹿臭いといふ風な睨み方であつた。

『いや、拂つてくれ』

娘は主婦を一ト目見て、『ハイ』と答へ、出て往つた。

フイオーゼンは笑つた。兩脇を抱へて笑ひこけた。あまりに道化てゐる、彼れの『金はいらぬ』と主張してゐる矢先きにはあまりに滑稽だ。

『え？　よかつたね、隨分といゝ』

併しジツプの顏の嚴肅なのは去らなかつた。そして彼女はことの矛盾してゐるのを見て、自分よりも容易く可笑味を感ずることを知つてゐるので、彼は再び恐怖を感じた。何か變つてゐる。そうだ、疑もなく何か變つてゐる。

『わたしは昨晩何か非道いことを爲たかね？』

彼女は肩を振つて、窓の所へ行つた　彼は暗然と彼女を視、飛上り、彼女の横を通つて庭へ出た、そして殆ど時を移さず

（三九頁へつゞく）

編輯室にて

事務所らしい事務所もないまゝに一ケ月をすぎた。お友だちのオフヰスや、停車場の待合所や、おそばやや、お汁粉ややその他がそのときどきの私たちの事務所代りに役立つて來た。例へば宮城前の廣つぱだとか――あそこで、私はほんとうに久し振りにタンポヽの花の咲いてゐるのをみた。子供の頃、よくこれを吹き飛ばし吹き飛ばしして友達と遊び廻つたつけ、となつかしく思ひ出し乍ら――又、日比谷公園だとか――日比谷ではつゝじがまつ盛りで燃えるやうに咲いてゐた。久し振りだなあ、と私は感慨に堪えず歩きまはつた。それから芝公園や半藏門の樹かげ森かげも私たちの足溜りであつた。

　これで、會ひたい時に會ひたい人に會ふことが出來、先方の意志も無線のやうな素早さで私たちまで傳へる事が出來る何かの仕掛けがあつたら、なまじいに事務所なんか持たないであつちへ行き、こつちへ行つて用を足す方が餘つ程自然で、面白いかしれないのねえ、と、私たちはこんなノンキな事を云ひ合つたりしてゐた。

　然し、始終私たちをたづねて下さつた若いお友だちとは大分御ぶさたになり勝ちで、淋しい事に思つてゐる。早く事務所を持つて、一齊に皆さんをお招きしたいと思ふ。

　私たちの新事務所に就いて、悉しい計畫を本月號で發表したいと思つてゐたのであるけれど、丁度二十二日から開かれる全國女教員大會に傍聽がてらある婦人勞働組合の會合に出かける事になつてゐるので、出立前何かと忙しくて書けなくなつてしまつた。

　然し仕事は着々と進んでゐる。六年越しの私たちの苦闘が、今報いられるのかと思はれる程、會ふ人毎に、過分の好意とはげましを與へてくれられるので、どれだけ力強く働かれてゐるか測り知れぬ。

　此際に、讀者の三倍加運動もぜひしたいと思つてゐる。どうぞ、一人で二人づゝ、左手と右手に一人づゝの讀者を誘つて來てほしい。(む)

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢（郵税五厘）
半年分　壹圓四拾錢
壹年分　貳圓八拾錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和二年五月廿五日納本
昭和二年六月一日發行

發行編輯兼印刷者　東京市外中野町園三二四四　奥むめお
印刷所　東京市小石川區西古川町二五　中外印刷株式會社
發行所　東京市芝區愛宕下町二ノ三　職業婦人社
振替東京六四一一六〇番

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和二年五月廿八日 印刷納本
昭和二年六月五日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第五卷 第六號
（定價二十五錢）